

俺の霊圧は消えない

ディアブロー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

霊圧が消える男——茶渡泰虎。

「俺の霊圧はそう簡単には消えない」

脱・霊圧が消える男を目指す。

# 目次

チャドと尸魂界（ソウル・ソサエティ）篇	
チャドが霊圧を消した……だと!?	1
チャドが極楽を味わう……だと!?	7
チャドが護る……だと!?	15
チャドが主人公っぽい……だと!?	27
チャドがツツコむ……だと!?	38
チャドの戦う相手が……何……だと!?	48
チャドが嫉妬される……だと!?	
チャドが再びツツコむ……だと!?	59
チャドが再び嫉妬される……だと!?	72
チャドが天に立つ……だと!?	84
チャドが挟まれる……だと!?	96
チャドが恐怖する……だと!?	108
チャド専用……だと!?	120
チャドと破面（アランカル）篇	
チャドが再び嫉妬される……だと!?	132
チャドの霊圧がついに……だと!?	144
チャドが再び挟まれる……だと!?	

156  
チャドが硬い……だと!?

169

## チヤドと尸魂界（ソウル・ソサエテイ）篇

チヤドが霊圧を消した……だと!?

女物の派手な着物を羽織り、無精髭を生やし、長い髪を一つに束ねて簪で留め、笠を被り、草履を素足履きし、女物の派手な長い帯を袴の帯に使っていたりと、やたらと特徴のある外見をしているがナイスミドルな男が、まだ年若き高校生と戦っている。

だが、その戦いは素手と刀……高校生が素手で、ナイスミドルな男が刀を持っており、普通に考えたら高校生が危険な殺人鬼に遭遇してしまった状況だ。

「参ったねエ……君、強いね。」

今ので終わりにするつもりだったんだけど」

もつとも、素手で戦っている高校生は、本当に素手なのかと聞かれたら、ただの素手とは言い難い。

2 m近い大柄な体格の高校生。だが、人間のものとは思えぬ異形な腕だ。髑髏の様な模様が入った黒を基調とした巨大な盾のように変化した右腕と、肩付近が尖った形状をしているが右腕に比べてシンプルな白い左腕。

「俺の霊圧はそう簡単には消えない」

浅黒い己の皮膚を媒介としたその力は、刀を容易に防ぐ硬度を誇っている。

高校生だが、高校生には見えない大人びた風貌の男——彼の名は、茶渡泰虎。

またの名を、” 霊圧が消える男”。

「僕もそれなりに本気を出さないとイケないかな」

その茶渡泰虎は脱・霊圧が消える男を目指し、強者へと挑むのである。

?????????

ある日……中学生の俺がダンプカーに轢かれた日のことだ。

それまで、オートバイに正面衝突されようと大した傷を負ったことがなかった俺だが、さすがの俺もダンプカーが相手では無傷とはいかなかった。打撲傷程度だったが、怪我の具合についてはどうでもいいだろう。

重要なのは、俺がダンプカーに轢かれた瞬間に、とある記憶が甦ったことである。

それは俺が……茶渡泰虎という人物がどのような人物なのか……近い将来、どのよう

な試練が茶渡泰虎に振りかかるのか……俺はそこで初めて、茶渡泰虎に転生していたことを知った。正確には、思い出したとでもいふべきだろう——前世の記憶とやらを。

この世界が、“BLEACH”という死神を題材とした物語で、茶渡泰虎がその物語の登場人物あることも、この物語の主人公の親友であることも、そして……茶渡泰虎が主人公の親友なのに嘯ませ犬ポジションであることも全て思い出してしまった。

ダンブカーに轢かれ、数日後に目が覚めた俺は、生きていることに対する喜び以上に、茶渡泰虎に転生していたという悲しみに暮れた。しかも、目が覚めた翌日に物語の主人公である親友の黒崎一護が見舞いにやって来たのがより拍車をかけた。悲しみの度合いはかなりのものだ。もう絶望の領域である。

雑魚狩り担当という嘯ませ犬となり、何故かとてつもなく強い敵と戦わなければいけなくなるという不運の連続。

俺が今現在進行形で戦っている”護挺十三隊”八番隊隊長・京楽春水という後の総隊長もとてつもなく強い敵だ。もしかしなくても、現時点では主人公黒崎一護が戦っているであろう戦闘狂よりも強い。

何をどうしようとも、茶渡泰虎の霊圧は消えてしまう。これも、決して乗り越えることなどできない試練の一つ……無理ゲーというものだ。

だが、俺は前世の記憶を取り戻し、茶渡泰虎に転生したことを知ってからまったく何

もしなかったわけではない。正確には何もしなかったに等しいかもしれないが……。神様頼み的な運任せの行動だ。

俺がとつた行動は、靈感がとつともなく強く、その身に強大な力を宿した黒崎一護のそばになるべく多く、長くいて共に行動し影響を与えられ、この物語のヒロインに向けて己の願望を強く願うこと……。ただそれだけ。

ただそれが、茶渡泰虎に転生した俺の靈圧が消えない為の唯一の方法だった。

「その右腕の盾……」鬼道を跳ね返せるんだね。まさか六十番台の鬼道を跳ね返せるとは思いもしてなかったよ」

まるで、七つ揃うと願い事を何でも叶えてくれる不思議な玉に願い事をするかの如く、俺はこの物語のヒロインにとにかく願った。

知らぬ内に体内に無許可で異物願玉混入されていたヒロインに向かってとにかく願った。消えない靈圧が欲しい——と。

コントラアタカル・デ・ヒガンテ  
巨人の逆襲

贅沢を望んだつもりはない。

とにかく、勝ったと思った矢先にとつともなく強い新たな敵が目の前に現れて靈圧が

消えてしまうという茶渡泰虎の身に起きる負の連鎖から解放されたかっただけなのだ。とりあえず、霊圧が消えない。俺が知る茶渡泰虎よりも強い……そのようになることを望んだ。

その結果、茶渡泰虎に転生した俺の腕は真の力をすでに解放したのである。それと、棚からぼたもちというべきか、新しい能力を得ることもできた。

八番隊長・京楽春水の鬼道を跳ね返したのも、右腕の盾 ブラッ・デレチャ・デ・ヒガシテ 巨人の“右腕”が得た新しい能力である。自分よりも遥かに強い相手の技を跳ね返せるかは一か八かの賭けだったが、上手くいって何よりだ。

だが、霊圧も増し、新しい能力も得ることができたが、それだけで未来の総隊長に勝つことができるか——答えは否。無理だ。勝てるはずなどない。

俺は簡単に命をかけたたりなどしない。

「とりあえず逃げるとしよう」

「ん？」

俺が願う事をして“機動力”も得たのである。

俺が知る茶渡泰虎は機動力がまったくない典型的なパワータイプ。贅沢は望んだつもりはないが、霊圧が消えないことに次いでそれは望ませてもらった。

ボラドール・デ・デアプロ  
悪魔の飛翔

左肩付近から生えた翼。俺は飛んで逃げる。

「おお!？」

ちよ、ちよつとちよつと！翼まで生えちやつて本当に人間かい!？」

「茶渡泰虎だ。

さらばだ…：京楽春水」

機動力がまったくなかった茶渡泰虎が得た悪魔の翼。人間離れしていつているのは、  
霊圧が消えてしまう負の連鎖から解放された代償か…。

代償とはいっても、空を翔べる気持ち良さを知った今となってはまったく気にしては  
いない。

とにかく、俺はここから逃げる。

そして、人気のない場所に降り立ったら…：自ら霊圧を消して、一先ず身を隠そうと  
思う。

チヤドが極楽を味わう……だと!?

死後の世界” 尸<sup>ソウル・ソサエティ</sup>魂界”。

その尸魂界に足を踏み入れた現世で生きる4人の高校生達。

黒崎一護、石田雨竜、井上織姫、そして……茶渡泰虎。

彼ら4人の目的は、僅か数ヶ月という短期間ではあったが、共に過ごした朽木ルキアという名の死神を助けることだ。

「む、目を覚ましたか一護」

「……」

チヤ、チヤド、それに……って、誰だよアンタ?」

だが、簡単に果たさせる目的ではなく、まだ誰も朽木ルキアのもとに辿り付けてはいない。

相手は尸魂界を守護する”護挺十三隊”……黒崎一護達は圧倒的に数で劣っている。多勢に無勢だ。尸魂界の都市”瀨霊廷”に侵入する直前に、志波岩鷲という協力者を得たが、それでも5人……5人と1匹……いや、正確にはさらにそこに1人加わって計6

人。

もつとも、尸魂界についてやたらと詳しく、道案内を務めてくれている夜一という名の喋る黒猫が、本当は人間というか死神であることを茶渡泰虎以外……黒崎一護達は知らず、夜一を戦力には数えていない。黒崎一護達は無謀にもたった5人で朽木ルキアを助け出すつもりでいた。

護挺十三隊をたった5人で相手にするなどあまりにも無謀な行動。とくに上位の死神達……そのなかでも隊長、副隊長の実力は異次元で、自殺行為に等しい。

現に、黒崎一護は副隊長相手に勝利するも重傷を負い、回復後に隊長とも戦い相討ちとなり死にかけてしまった。それでも、隊長相手に相討ちは大殊勲だろう。

それだけ、護挺十三隊の隊長は強いということだ。

「一護は更木剣八相手に相討ちで、チャドは京楽相手に逃げ切る……隊長相手に生き延びるとは、おぬしら本当にまったく大した奴らじゃ」

それと、隊長と戦ったのは黒崎一護だけではなく、茶渡泰虎もだったのだが、チャドは実力差を瞬時に見極め逃亡。一見、情けない行動に見えなくもないが、チャドの行動はまさしく逃げるが勝ち。チャドは朽木ルキアを助け出すという目的を最優先したただけだ。

だからこそ、この状況下で、しかもまだ年若いチャドが目的を優先して、逃げるこ

を選択できたことに夜一は感心している。若者は逃げるは恥と思う者が多いが、時には逃げることも大切なのだ。

「あ、そういうえばチャド、お前の霊圧が急に消えたから心配したんだぞ!」  
「すまない。だが、相手は隊長だったから仕方ない。」

朽木を助け出す為に最善の方法をとっただけだ。逃げた後に霊圧を消して隠れていた」

逃走後、霊圧を消したチャドは夜一と合流し、死にかけていた黒崎一護を救出したのである。

そして、今に至るといわけだ。

「チャ、チャドが逃げた…だと!」

「チャドが戦った隊長は八番隊隊長・京楽春水。飄々とした男じゃが、古参の隊長で思慮深く、13人の隊長達の中でも間違いない上位の実力者——逃げ切れただけでも大殊勲じゃ」

「カッコいい男だった。あんなダンディーな男になりたい」

そんなこんなで現在は、ようやく目を覚ました一護を見下ろすように上半身裸のマツチヨなチャドが立ち、その隣には褐色肌のナイスバディなグラマラスな女が全裸姿で平然と立っている。

「ふッ、チャド……おぬしはなかなか見所がある男じゃ。おぬしなら京楽を超えらると儂は思っておるぞ」

「夜一さんにそう言われると、本当に超えられる気がする。頑張るとしよう」

上半身裸のマツチヨなチャドと、ナイスボディな全裸の夜一が語り合うその光景は、端から見たら情事後の男女に見えなくもない。

ただ、夜一が喋る猫だと信じ込んでいた黒崎一護は、この事態にまったくついていけずに置いてけぼりだ。

「な、なア、その人が夜一さんってどういうことだ？ つーかその前に1ついいか——服着ろー！！」

健全な男子高生にはあまりにも過激な光景で、黒崎一護がツツコミを入れるのは当然だろう。

対して、チャドは夜一の全裸を堪能していたのか至極ご満悦のようだ。欲望に正直で健全だ。

「チャドと違って初心<sup>うぶ</sup>じゃな。

チャドは動揺することもなく、儂の美しい裸体を隅から隅まで絶賛しておったぞ」

「夜一さんのような美しい裸体はそうそうお目にかかれなからな。最高だ」

「ふふふ、素直で可愛いのを。」

仕方ないからこのまま全裸でいてやろうではないか」

黒崎一護は思い出した。

茶渡泰虎はそういえば意外とモテることを……とくに年上に。近寄り難いが、接してみたらフレンドリーで、そしてレディファーストを心得ている。

腕つぶしも強く、高校での成績もトップクラス。女の先輩方からのウケもかなりイイ。

そして、黒崎一護はもしかしたらと気付く——チャドは、男として自分の先を行童貞卒業してっているのではないかと……。

「！」

黒崎一護の心の中を読んだのか、チャドは余裕のある笑みを浮かべていた。

「何……だと……」

?????????

現在、俺は腕に花を抱えているというか、夜一さんをお姫様抱っこした状態で”

ポラードル・デ・ディアフロ

悪魔の飛翔”を展開して空を飛んで一護を追っている。夜一さんの抱き心地は良  
く、素敵な香りがするが今はそれどころではない。ちなみに、夜一さんは服を着てし  
まっている……残念だ。

「しかし、おぬしいつの間に翼なんて生やして翔べるようになっていたのじゃ?」

京楽春水から逃亡後、俺は身を隠して影で動く為に霊圧を消して、どうにか夜一さん  
と合流した。どうやら、その行動で一護には『チャドの霊圧が…消えた…!?!』と思わせ  
てしまっていたらしく、もしかしたら石田と井上にもそう思わせてしまったかもしれな  
い。

夜一さんも俺が京楽春水に負けてしまったと勘違いしてしまっていたらしく、俺が姿  
を見せた時は珍しく驚いた様子を見せていた。こればかりは俺だけの霊圧に集中して  
感知していたわけではない為に仕方ないだろう。寧ろ、一番気にするべきは一護だ。

とまあ、そんな具合で夜一さんと無事に合流することができた俺は、護挺十三隊十一  
番隊長長・更木剣八と相討ち死にかけていた一護のもとに駆けつけ、一護を回収して夜  
一さんに連れられて秘密基地へと向かった。

その後、秘密基地にて一護に治療を施したのだが、夜一さんが元の姿に戻って全裸で  
治療していて最高だった。遠慮なく隅から隅まで堪能させてもらったが、これほどの美  
しい裸体は見たことがない。出るところ出て、引き締まるところは引き締まって、美しい裸

体だった。

京楽春水から逃げ延びたご褒美なのか、おっぱいを揉みたさそうにしていた俺の心の内を読んだのか、誉めちぎったことで気分を良くしてくれたのか、ちよつと揉ませてくれた夜一さんは寛大だ。惚れてしまいそうになり、茶渡泰虎に転生したことをこれほど感謝したのは初めてである。

そんなこんなで、一護が目覚めるまで贅沢すぎる極楽を味わった俺だが、事態が急転してしまったことで、“懺罪宮”という朽木ルキアが収監されている場所に飛んで向かっているところだ。

一護は夜一さんの貴重な道具を勝手に借りて先に行ってしまった。まったくせつかな……。

とはいえ、懺罪宮に到着しても俺にできることは何一つないはずだ。確か、夜一さんが一護の内臓に手刀で直接麻醉系の何かを叩き込むという荒療治を行い、再び逃亡のはず。

それを考えると、寧ろ俺と一緒に行かない方が……夜一さんの“瞬歩”にはさすがについてはいけない。だが、レディに男を担がせるわけにもいかない。

「チャド……懺罪宮に到着したら、岩鷲には申し訳ないが一護だけを連れて先に逃げろ。

懺罪宮には今、浮竹もいる。奴がいるなら、岩鷲は安全じゃ」

先に俺は、一護を連れて逃げていいとのことだ。

夜一さんの逞しさにますます惚れてしまう。いつか、俺が彼女を守り抜けるまでに強くなれたらなと思つてしまった。

「おぬしも決して、朽木白哉と戦おうとするでないぞ……とはいえ、京楽から逃げ切れたことも然り、今のおぬしの霊圧からして、もしかしたら…。」

まあ、朽木白哉は一護が成長する為にも倒さねばならん相手じゃから、一護に任せろ」  
ここから先、事態がどう動くのか…。

どうやら、夜一さんの物言いからして俺の霊圧は自分が思っている以上に進化してくれているようだ。しかし、霊圧の消えなかつた茶渡泰虎はどのように物語に介入しているのか未知の領域——気になるところである。

ただ、俺はここで1つ非常に重要なことを思い出した。

朽木ルキアの内に封印されたアレに願ひ事をする最終チャンスではないかと…。

茶渡泰虎の霊圧が今後も消えない為に、俺はこの機会を絶対に無駄にしないことを心に誓う。

チヤドが護る……だと!?

場所は「懺罪宮」。

黒崎一護がついに——朽木ルキアのもとに到着した。

「助けに来たぜ、ルキア」

満身創痍の状態でありながら、チヤドと夜一の制止を振り切つてまでここまでやつて来た黒崎一護の執念は大したものである。ただ、その執念は確かに大したものだが、一番隊隊長・更木剣八との死闘の傷が癒えぬなか、寧ろ傷が開いてしまつている状態でこの場所にやつて来るとはあまりにも無謀。

懺罪宮には今、朽木ルキアの直属の上官である十三番隊隊長・浮竹十四郎と、一護にとつては宿敵でもある六番隊隊長・朽木白哉がいる。

朽木ルキアとの再会も束の間……懺罪宮の橋の上にて、朽木白哉との戦いが幕を開けようとしていた。

「心配すんな……ルキア。」

「これでも少しは強くなつたんだ。死にやしねえよ」

黒崎一護は、心配な表情を向ける朽木ルキアにそう告げる。隊長が2人いるこの状況でも、絶対に死なないのだと……いや、寧ろ自分に言い聞かせているのかもかもしれない。ここで死ぬわけにはいかない……。絶対に勝って、朽木ルキアを助け出すと……。黒崎一護は己の魂に誓うのだ。

とはいえ、朽木ルキアの直属の上官である浮竹十四郎に関しては、隊長とはいえ黒崎一護側からしたら脅威とはいえない難い死神のようだ。夜一曰く、浮竹十四郎は義理堅い男とのことで、彼らが賊とはいえず、部下の朽木ルキアを助けに来た者達を牢に入れこそすれ、殺すことはないだろうとのことだ。寧ろ、内容次第では手を組める可能性もあるとのことだ。

問題は、やはり——朽木白哉である。

「せっかく拾った命を捨てに来るとは……愚かな小僧だ」

黒崎一護が懺罪宮に到着すると、先に到着していた志波岩鷲は朽木白哉によつて深い傷を負わされていた。

そして、朽木白哉の凶刃が再び黒崎一護に迫っている。

黒崎一護が朽木ルキアから譲渡された死神の力を奪い去つたのはこの朽木白哉で、2人には浅からぬ因縁があり、黒崎一護にとってはリターンマッチのようなもの。

「一」

「へッ、今度はちゃんと見えてるぜ……朽木白哉」

死神の高等歩法”瞬歩”。その瞬歩に回転をかけることで発展させた特殊な瞬歩”閃花”。

この技は、黒崎一護が朽木白哉との一度目の戦いで、為す術なく背後から貫かれたものだ。

しかし、短期間で急激に成長し、護挺十三隊の三席、副隊長、隊長と次々に撃破した黒崎一護が、同じ技を食らうことはない。朽木白哉の姿をその瞳にしっかりと捉え、背後からの刺突を斬魄刀”斬月”で見事に防いでいる。

「この短期間でここまで成長するとは末恐ろしい。

だがそれでも、私と貴様の間には決して埋めようのない力の差がある。

貴様がその力に自惚れる前に、天と地ほどもある力の差を見せておいてやろう」

だからといって、黒崎一護が朽木白哉を圧倒しているというわけではない。まだ朽木白哉は力の底を見せておらず、斬魄刀を解放すらしていないのだ。

『散れ』

刀を真上に向けて構えた朽木白哉は、冷徹な瞳を黒崎一護に向けながら”解号”を口にする。

すると、刀身が目に見えないほど無数の刃に分裂した。

この無数の刃が光に当たり、桜の花弁のように見える。それはまさに、散り行く桜。

千本桜

美しくも冷酷な桜が血に染まろうと…。

?????????

「チャド、おぬしは京楽と戦って隊長の力を理解したじやろうが、京楽は斬魄刀を解放しなかつたじやろう?」

先走った一護を回収するべく、懺罪宮へと急いで向かう俺と夜一さん。

そんな状況のなか、俺の腕の中の夜一さんがそう尋ねてきたのだが、何やら嫌な予感がする。

「いい機会じゃ。

相手は白哉坊じやが、隊長の斬魄刀解放を経験してこい」

とてつもない無茶振りをされてしまった。さつきと言っていることが違うのだが…。  
猫は気紛れだから急に気が変わったのだろうか…。

せつかく霊圧が消えなかつたのに、俺の行動は霊圧が消えるフラグを常に立てるとい  
うことなのだろうか…。一難去つてまた一難どころではない。運命が俺の霊圧を消し  
に来ている。

そんな邪悪な足音が聴こえる気がする。

「安心しろ。ヤバくなつたら儂が必ず助けてやる。

それから——頑張つたら更なるご褒美を与えよう」

俄然、ヤル気が漲ってきた。今なら何だつてできるような気がする。寧ろ、一護にか  
わつて俺が『一瞬で終わらせる』と口にしそうな勢いだ。

俺の腕の中で妖艶な笑みを浮かべている夜一さんは、とんでもなく年上なのに小悪魔  
という言葉が似合ってしまう。我ながら単純だと思ってしまうが、更なる極楽の為に俺  
こと茶渡泰虎は頑張ります。

そして固く、強く誓います。

俺の魂に。



黒い片翼の悪魔が懺罪宮に舞い降りた。

ディアブロ・グアラディアン  
守護悪魔

六番隊隊長・朽木白哉が斬魄刀を解放し、”始解”千本桜による目に見えぬ刃が黒崎一護に迫るも、巨大な黒い片翼が彼を包み込んで窮地から救う。

「チャ…チャド…」

「間一髪だな、一護。」

間に合って良かった」

ホツと一息吐くのは、巨大な黒翼の持ち主——茶渡泰虎。

黒崎一護の親友で、これまで幾度も互いに背中を預け戦ってきた戦友でもある。その戦友は尸魂界でも変わることなく、黒崎一護を窮地から救い出した。

「お、お前…その翼…」

「む、これか？」

気付いたらいつの間にな…この翼は飛ぶだけではなく、防御力も高いらしい。この程度の攻撃なら余裕のようだな」

そして然り気無く、朽木白哉など大したことないとチャドは煽る。これは所謂、フラグというやつだ。

ただ、チャドの黒い片翼が防御力が高いのは確かで、朽木白哉の始解の攻撃力が彼の想定よりも低く、傷一つ負っていないのは事実。それ故の余裕だろう。

黒崎一護を回収にやって来た場所に、目的の人物である朽木ルキアがいることを確認すると安堵の笑みを浮かべながら一言声をかける余裕まである。

「朽木、助けに来たぞ。」

（俺の声が届いているか）崩玉。どうかここまでやって来たぞ。まずは礼を言わせてくれ。俺の願いを叶えてくれて、どうもありがとう。そして、俺はまた君にお願いする。

どうか——俺に力（霊圧）を!!」

「チャ、チャド……お前まで……」

もちろん、朽木ルキアは驚いているが……チャドが内心で朽木ルキアではない、彼女本人すら知らない彼女の内に封印された「崩玉」という代物に話しかけていることなど知るはずがない。それは、黒崎一護を含む全ての者達も同じだが……。

とはいえ、悠長に再会を喜びあっている状況でも、チャドがゆつくりと目的を果たしている余裕もない。朽木白哉はチャドの行動が気に入らないのか、今度は斬魄刀による

攻撃ではなく死神の靈術”鬼道”にて追撃。

『破道の七十三・双蓮蒼火墜』

しかも問答無用で上級鬼道を放ってくるという怒りの形相だ。詠唱を唱えて放つ鬼道には、詠唱を省き発動するという高等技術”詠唱破棄”という技法がある。本来なら、詠唱破棄は詠唱を唱えた鬼道には威力が劣ってしまうのだが、さすがは隊長……詠唱破棄の鬼道も威力は絶大。

「ツ——（詠唱破棄でこの威力!?! 兄様は本気で一護とチャドを殺すつもりだ!!）」

一護! チャド! 逃げろ!!」

強力な蒼い炎がチャドと黒崎一護へと襲いかかる。

「な、何だよこれ!?!」

これほどの威力の鬼道は初めて体験するからなのか、黒崎一護は驚きを隠せずにいる。何より、彼にはこの鬼道を防ぐ有効な手立てがまだない。正確には、一つだけある。ようだがまだ自由自在に狙って放つことができないようだ。

そうなつてくると、対応するのは自然とチャドになるわけで…。

アリエント・デ・ディアブロ  
悪魔の息吹

チャドが黒い片翼を一振りすると、瞬く間に蒼い炎が打ち消されてしまった。それはもう、蠟燭の火を手で扇いで消したかのような至極簡単な行動だった。

「何……だと……？」

隊長が放った上級鬼道を簡単に打ち消す人間。さすがの朽木白哉も驚かずにはいられない。

「次はこちらの番だ」

すると今度は、チャドは何気ない表情のまま、左手の指先から霊圧の弾のようなものを朽木白哉に向けて放った。

ブラソ・イスキエルダ・デル・ディアプロ  
” 悪魔の左腕 ”

から放たれる中距離攻撃。彼の記憶にある茶渡泰虎という男は典型的なパワータイプで、このような攻撃をするところを見せたことがなかったはずだが、この茶渡泰虎は違う。

霊圧が消えない為ならば何だっける。

バラ・デ・ディアプロ  
悪魔の弾丸

「貴様……」

朽木白哉の頬を掠った弾丸……頬から一筋の血が滴り落ちた。

始解を防がれただけではなく、黒い片翼を一振りしただけで上級鬼道を打ち消され、それだけではなく反撃されようとは……。朽木白哉にとつて想定外の事態。

それに、チャドは黒崎一護を護つて戦っている。チャドが黒崎一護を護りながら戦うなど、これまでありえなかったことだ。これもきつと、チャドの願い事のおかげなのか……。

「隊長格に匹敵する貴様のその霊圧……なるほど、貴様達人間の中で、最も強いのは貴様か……」

「そんなことはない。」

（え……隊長格に匹敵する霊圧？俺の霊圧が？）

「確か今の一護の霊圧が隊長クラスに匹敵してたんじゃ……俺……一護超えてるの？……何……だと……!?!」

朽木白哉の言葉にチャドは戦慄する。今現在、自分の霊圧がどれ程のものなのか比べたことがなかったチャドは、自身の霊圧が隊長格の霊圧に匹敵するものだと言われ、表向きは謙遜しつつ、内心では大きく驚いている。

ただ、チャドはそれを純粋に喜ぶことはできない。確かに、自身の霊圧が消えないことを強く望んでいた。

「貴様は私が全力を持って排除する」

しかし、強くなればなるほどそれに比例して難易度が上がっていくのだ。チャドは夜の無茶振りでこの場所にやって来て、それを痛感している。

『卍解』

運命が本気で茶渡泰虎の命を奪靈いにやって来ている。

”卍解”——それは、斬魄刀戦術に於いて、奥義のようなものだ。その奥義を朽木白哉はチャドに放とうとしている。

「お、おいッ白哉！卍解はやりすぎだ!!」

事態を重く見た浮竹の制止の声も朽木白哉には届いておらず、何としてもチャドを排除するつもりのようなのだ。

斬魄刀の切っ先を下に向け、斬魄刀を手から放そうと…。

「そこまでじゃ」

だが、朽木白哉の卍解は発動されることなく、朽木白哉の腕と斬魄刀は布でがっしりと固定されていた。

「あ、あれはッ」

新たな介入者の登場。その者を知っている浮竹十四郎は、100年ぶりに見たその者に驚きを隠せない。

「貴様は——四楓院夜一」

もちろん、驚いているのは浮竹だけではなく朽木白哉も同様だ。

一方、夜一の登場にチャドは安堵の息を漏らす。これで死霊圧が消えずなずに済む。

現れたのは、チャドをこの場所に送り込み、朽木白哉と戦うように仕向けた張本人小悪魔。

「チャド、よく頑張った。」

まさか白哉坊相手にここまでやれるとは思ってもなかった。ご褒美増し増しじや」

夜一の言葉で、チャドの心が燃える。

チャドは思った……今なら、卍解にも勝てると…。

チヤドが主人公っぽい……だと!?

結果から言おう——俺が朽木白哉の正解を体験することはなかった。

夜一さんは姿を現した後、一護の内臓に直接葉を叩き込むという荒唐治を行い、気絶した一護を俺が運んでその場から立ち去った。一護の血で服が血だらけになってしまったが、夜一さんに運ばせるわけにもいかず、何よりも親友を放っておくはずもなく、俺達3人は秘密基地へと帰還。

朽木ルキアを助け出すのは俺が知っている通り、処刑日当日に先送りされた。

もちろん、意識を取り戻した一護は朽木ルキアを放置してしまったことに憤慨していたが、夜一さんに呆気なく投げ飛ばされていた。しかもその時、『チヤドですら勝てない相手に勝てるはずがない』と夜一さんは言っていた。つまり、朽木白哉が言っていた言葉はどうやら事実のようだ——俺の霊圧が隊長格並というのは…。

それとついでのことに言うが……岩鷲、ここまでお疲れ様。あとは俺と一護に任せ、ゆっくりと怪我を治してくれ。

それはそうと、どうやら本当に崩玉への願いが叶ったということだ。ただ、朽木白哉

に排除すべき標的認定されてしまっているかもしれないのは憂鬱である。

俺も修行しなくてはいけない。しかし、どのように修行するべきか……。そろそろ、対人修業をしたかったのだが夜一さんは一護に付きつきりだ。ちよつと妬ける。

俺の記憶通りに一護は完全回復せぬまま先に修行を開始したが、俺はその間しばらく休んでおけとのことで、一護の修行風景を夜一さんの隣でただ眺めていた。

期限はあと2日。まだ、朽木ルキアの処刑日がさらに早まったという情報は伝わっていないが、恐らくその点に関しては変化はないだろう。記憶通りに、処刑日は早められる。何だかんだでこの世界は、黒崎一護<sup>主人公</sup>を中心に回っているのだ。

「さて、1日目終了じゃ」

そんなこんなで、一護の修業1日目終了し……。

「待たせたの、チャド……」褒美タイムじゃ」

俺はこれまでの戦いで疲れを癒すべく、夜一さんと温泉に入ることになった。俺達が身を隠している秘密基地には、傷を癒してくれる温泉が備え付けられているのだが、俺は夜一さんとその温泉を堪能中だ。一護は気を使ったのか……。いや、羞恥心というべきか……。夜一さんと一緒に温泉に入るなど一護には無理で、卍解を会得すること以上に難易度が高いのだろう。そそくさと温泉に入って傷を癒して上がり、あつという間に眠ってしまった。

つまり、ここからはご褒美タイムという大人の時間だ。

「おぬしには丁度いい修行相手を用意しておる。だからそう拗ねるでない。それよりもどうじゃ？ 男の背中を流すなど儂も初めてじゃからのう」

とはいえ、会話の内容にはそこまで色気などないが、夜一さんの裸体はやはり色気に満ち溢れている。それはそうと、夜一さんは俺の修業相手を用意してくれているようだ。さすがだ。夜一さんのことだから、イイ人選だろう。

それよりも、今は心を無心にして、余計なことなど一切考えず、この瞬間を堪能しよう。その身に——魂に焼きつけなければならぬ。

夜一さんが俺の背中を流してくれているのだ。黒猫の姿ではなく、褐色肌のグラマラスな裸体姿でだ。

ご褒美増し増し……その言葉通りだった。頑張つて良かった。夜一さんの豊満な「ぱいおつ」が背中の時々当たるのがまた至極の領域だ。戸魂界はまさに天国。

「チャド、もう少し……あと少しじゃ。  
この苦難を乗り越え、目的を果たして現世に戻った暁には、おぬしの言うことを何でも聞いてやる。最高のご褒美が待っておるぞ」

いや、天国は夜一さんなのか…。

「だから頑張つてくれ。期待しておるぞ、チャド」

一護よ……俺はお前の出番を食う勢いで頑張るぞ。



俺は、茶渡泰虎に転生したことに感謝していた。

だが、人生最高の瞬間が一瞬で終わってしまうのはどうやらお決まりらしい。

「ねえさま……」

お久しぶりです！夕四郎で……す……え？」

「何……だと……」

思ってもいなかった人物の登場に、俺はお決まりのセリフを口にしてしまった。それと、その人物は俺と夜一さんが混浴中なことに驚きすぎて呆然を通り越して脱け殻になっている。

「来たか。久しぶりじゃの、夕四郎。」

チャド、こやつは俺の弟の夕四郎じゃ。それから夕四郎……」

だが、俺の人生最高の瞬間は再び動き始めてくれた。

「この逞しい男が俺の弟子というかお気に入りかお気に入りかチャドじゃ！」

何故なら、夜一さんが弟に紹介すると同時に、俺のことをばいおつに抱きよせて紹介

してくれたからである。いつの間にか弟子になってたのは驚きだが、一生ついていきま  
す。

「僕は一護に付きつきりな為にチャドに修行をつけてやれん。じゃから、おぬしに頼み  
たい。それに、チャドの相手をするにはおぬしの為にもなるじやろう」

こうして、俺の修業の相手は夜一さんの弟——四楓院夕四郎が担当することになっ  
た。

??????????

双匣の丘の地下深くにて、高校生の2人——茶渡泰虎と黒崎一護がそれぞれ過酷な修  
行に打ち込んでいる。

黒崎一護は朽木白哉に打ち勝ち、朽木ルキアを助け出す為に、斬魄刀戦術の奥義”卍  
解”を会得するべく夜一の協力のもと、斬魄刀”斬月”の本体と思わしき存在と戦って  
いる。

恐るべき速さで吸収し、成長する黒崎一護。彼は本当に、僅か3日で卍解を会得する

かもしれない。

「ねえさまがお認めになられただけあり、本当に強いですね…チャドさん。

けど、ボクはそう簡単には負けませんよ」

対して、茶渡泰虎は夜一そっくりな人物と戦っている。お淑やかな貧乳の夜一といふべきだろうか…。いや、戦う姿は夜一に通ずるものがあり、スピードはとてつもなく速く、白打体術の腕前もかなりのものだ。

とくに、「死神の高等歩法」「瞬歩」に関しては相当なものだ。チャドもチャド流の歩法でどうにか対抗しているが…。

バツルス・デル・ディアブロ  
悪魔の歩み

夜一がチャドの為に用意した修行相手は、貧乳でお淑やかな夜一と言ったが、本当のところは彼女そっくりな弟——夜一に代わり、四楓院家の当主を務める四楓院夕四郎だ。

さすがは「瞬神」と謳われた白打体術最強の夜一の弟だけあり、チャドにとっても最適な修行相手である。

「だろうな。

（まさか夜一さんの弟がここで出てくるとは予想外だった。これも、俺の霊圧が消えていない影響なのか？）

チャドは今、四楓院夕四郎と激しい体術合戦を繰り広げている。実力は恐らく互角……いや、経験値を含めたら、まだ十数年しか生きていないチャドが劣っているはずだが、それでも才能とセンスでどうにか張り合い、勝負は拮抗したものだ。

「ボクは弱い男の義弟になるつもりはありませんよ」

ただ、四楓院夕四郎は何やら勘違いをしているのか、おかしなことを口にしてはいる。チャドにとっては願ったり叶ったりなこと、勘違いされたままでもいいかもしれないが……。

「お会いしたのは本当に久しぶりでしたが、ねえさまを見てすぐにわかりました。

ねえさまはチャドさんのことを男として気に入られています」

「何……だと……？」

（夜一さんが？100歳単位で年下の俺を？）

もしそれが本当なら……うむ、嬉しいな。そもそも俺はどんな女がタイプだったか？」

修行中にまったく別のことを考え始めてしまったチャドだが、体はしっかりと四楓院夕四郎の動きに対応している。ちなみに、どうでもいいかもしれないがチャドのタイプの女は気紛れな褐色肌巨乳と、気弱な隠れ巨乳だそうだ。典型的な金髪巨乳は今一つ興

味が湧かないらしい。つまり夜一はチャドのドストライクということだ。

そもそも、四楓院夕四郎がこの場所に到着した瞬間を考えると、勘違いしてしまうのも仕方ないかもしれない。

重度のシスコンである彼がこの場所に到着し、”愛しのねえさま”である夜一と久しぶりの再会を果たした時、その夜一はチャドと2人で温泉に入っていたのである。衝撃のあまり、しばらく脱け殻になっていたが、きつと殺意が湧いたはずだ。

それに、男と女が共に温泉に入る⇨親密な関係……四楓院夕四郎がそのような勘違いしてしまうのも仕方ないだろう。夜一が久しく服を着ることなく猫の姿で長らく生活していたことで、服を着ることに無頓着になつていたことをまったく知らないのも要因の一つだろうが……。それと、夜一は誰とでも温泉に一緒に入るわけではない。

夕四郎の言つたように夜一がチャドを気に入つていゝるのは強ち間違ひではないのだ。元護挺十三隊二番隊長兼隱密機動總司令官にして、最強の白打体術使いである夜の目から見てもチャドは面白い逸材であり、体つきなども彼女のタイプだったりする。やはり、体術使いということもあり、体つきがしっかりした男が好きなのだろう。

チャドと夜一の年齢差はかなりあるが、遥かに年下のはずの人間と結婚した死神も存在し、チャドはその者達の息子と親友……今後どうなるかは誰にもわからない。

「ボクと戦つているのに考え事とは余裕ですね!!」

「そんなことはない」

「本気でいきますよ!!」

### 破道の八十八・飛竜撃賊震天雷砲

先のことは誰にもわからない。しかし、今は恋愛事を考えている余裕などチャドにはまったくない。

夕四郎が、考え事をしているチャドに向けて容赦のない鬼道を放ってくる。死神の鬼道は、数字が大きいほど高度で強力なものだが、夕四郎が放ったそれは限りなく最高位に近いものだ。

大好きな姉を奪おうとするチャドへの怒り。夕四郎はこの修行を機に、チャドを排除しようとしているようだ。

「死神の鬼道。まだ二度しか見たことないが、そのどちらよりも強力だ。

（語呂の良さ断トツ1位のオサレな鬼道をここで体験できるとはッ!!）」

対して、チャドは修行に集中し直すも、夕四郎が放った鬼道に感動を覚えている。

「!

（避ける素振りを見せない…まさか、右腕の盾で防ぐつもりなのか!?)」

まともに食らったらかなりヤバイ威力の鬼道だ。

だが、チャドが二度経験した鬼道は並の死神のものではなく、八番隊隊長・享樂春水と六番隊隊長・朽木白哉が放ったもので、護挺十三隊の鬼道の使い手の中でもトップクラスの者達が放ったものだ。

コントラフタカル・デ・ヒガンテ  
巨人の逆襲

「なッ——跳ね返した…だとッ?!」

チャドは右腕の盾 ブラッ・デレチャ・デ・ヒガンテ “巨人の右腕” で夕四郎の鬼道を難なく跳ね返す。

夕四郎は護挺十三隊に所属こそしていないが、尸魂界ソウル・ソサエティにおける貴族の最高位である正一位の位を持つ“四大貴族”の一角である四楓院家の23代目当主だ。

由緒正しき四大貴族出身ということもあり、その身に宿した霊圧も相当なもの。

その夕四郎の鬼道をチャドは跳ね返した。つまりそれは、それだけチャドの霊圧が増しているということでもある。

「俺はまだまだ強くなる」

力強い表情を浮かべながら、チャドがそう口にする。何と頼もしいことだろうか…。その光景を、少し離れた位置で嬉しそうな笑みを浮かべながら夜一が見守っているの

だが、チャドはそれに気付いてはいない。

「さあ、続きだ。来い……夕四郎」

決戦の日は間近……チャドは止まらない。

チャドがツッコむ……だと!?

運命の日——朽木ルキアの処刑日前日の夜遅く…。

双の丘の地下深くにて、親友同士が激闘を繰り広げている。

チャドが1日遅れで修行を開始し、黒崎一護の卍解修行が2日目に突入したその日、事態は急展開を迎えた。

朽木ルキアの処刑時刻が早まり、明日の正午に処刑が決行されることになったのである。その凶報に最も驚き、焦ったのは夜一と夕四郎姉弟だ。

一護は卍解を会得できず、チャドも短時間でのこれ以上の成長は見込めず、朽木ルキアを救出することはできず、夜一と夕四郎の脳裏に過つたのは作戦失敗という最悪の展開だ。

しかし、チャドと一護は決して諦めてなどいなかった。

一護は卍解を会得できなかった時のことなど一切考えずに、今日中に必ず卍解を会得するのだと己を強く奮い立たせた。

チャドは夜一からのご褒美の為に……もちろんそれだけではなく、最後まで霊圧が消

えることなく戦いに参加できるようにと、更なる力の開花を目指した。

そして、チャドと一護は本当に有言実行を果たしたのである。

その2人は現在、対護挺十三隊隊長格を想定しつつ、今現在の自身の力を把握し、体に慣らす為の調整を行っているところだ。

「チャドさん、あなたは大した男だ。

ねえさまが気に入るのも頷ける」

「じゃろう？」

しかし、ここまで成長するとは思ってもおらんかった。まあ、それは一護ものじゃが……本当に未恐ろしい子供達じゃ」

チャドは夕四郎を倒し、一護は正解を会得した。

彼らが最終調整を行うに相応しい相手は、今この場所にはお互いしかない。

チャドと一護にとって、これは初めての対決だ。模擬戦

「な……何なんだよコイツら……」

そのハイレベルな模擬戦——激闘を目の当たりにし、啞然としているのは眉毛から額、首から上半身にかけて大仰な刺青を入れた赤い髪の下派手な死神——阿散井恋次だ。ちなみに、チャド達に処刑時刻が早まったという凶報をもたらしたのはこの阿散井恋次である。

それはそうと、どうして敵であるはずのこの男がこの場所にいるのか……阿散井恋次は黒崎一護に敗北したことをきっかけに腹を括り、幼馴染朽木ルキアを助け出す為に、一護同様で卍解の会得を目指してやって来たようだ……なのだが、その阿散井恋次は卍解を会得することにこそ成功したが、チャドと一護の激闘という模擬戦を目の当たりにし、卍解を会得するだけでは駄目だったのではないかと、目的を果たす為にはチャドと一護並に強くないといけないなかつたのではないかと思いつつも、才能の違いを見せつけられ自信を失いかけていようだ。

しかし、阿散井恋次がそうなつてしまふのも仕方ないのかもしれない。

チャドは巨フランク・デレチャ・デ・ヒガンテ人の右腕と悪魔の左腕を解放した状態だが、まだまだ余力を残しており、まだ隠し札があるのではないかとすら思わせる余裕さだ。

対する一護も、阿散井恋次と戦った数日前よりも遥かに強くなっている。一護の必殺技「月牙天衝」も自在に放てるようになっており、それに何より……

「やっぱ強エな……チャド。」

お前が味方で本当に良かった」

「ふッ、一護もな。」

「『月牙天衝』のバリエーションが増えている……だと!？」

月牙を纏った斬れる竜巻……月牙螺旋衝……だと!？」

一護の放った斬れる竜巻を防ぐも、チャドですら内心で動揺している。一護の成長はチャドの想定以上。

これまで、お互いの背中を護り合いながら共闘したことはあれど、彼らが戦ったことなどなかった。

修行の成果を確かめる為の最終調整とはいえ、まさかこのような形でチャドと一護が戦うことになるうとは…。

それでも、お互いにとつてこの戦いが必要なのは確かだ。一護は想定よりも早く、たった2日で卍解を会得した。そして、チャドは四楓院夕四郎との修行で更に上の領域に至った。

「一護の野郎…卍解してないのに何て霊圧してやがる。あのチャドつて野郎もだ。コイツらすでに隊長格の霊圧に匹敵してやがる!!」

たった数日で、戦闘技術だけではなく霊力、霊圧も大きく増したチャドと一護。

阿散井恋次も卍解を会得し、他の副隊長よりも一歩先を行ってはいるが、まだ隊長格の領域には程遠い。

しかし、チャドと一護は彼が越えられなかった壁を、特別な理由があるが、容易に乗り越えてしまった。もちろん、特別な理由だけではなく、チャドと一護が血反吐を吐きながら必死に修行した成果でもある。

「コイツらなら本当に——ルキアを助け出すことができるかもしれないねエ」

正解をせずに、己が正解した状態よりも強いかもしれない一護と、その一護と対等に渡り合っているチャド。これでは、自信を失いかけてしまうのも仕方がない。

己の目的が、他人任せになってしまいうのも仕方ないのかもしれない。

ただ、自信を失いかけてしまっていたのは阿散井恋次だけではない。

「チャド、俺はお前が朽木白哉と戦ってる時、すげえ情けなかった。今まで一緒に、互いの背中を護り合いながら戦ってたのに、いつの間にかお前は俺の遙か先を行ってた。もう一緒に戦えないのかと思って悔しくて……それと同時に寂しかった」

黒崎一護もまた、チャドの力を目の当たりにして同じ思いを味わっていたのだ。それでも、一護は決して立ち止まることなく、もがき苦しみながらも必死に修行した。

何度倒れようとも立ち上がり、決して諦めなかった。

「チャド、また俺に背中を托けてくれ」

「一護……」

（え……つまり、一護はあの場所で……朽木ルキアの前で己自身の無力さを心の底から呪ったってこと？）

これまで背中合わせで互いを護り合っていた唯一無二の親友が、知らないうちに己よりも遙か先を歩んでいれば悔しくて仕方なく、己の無力さを呪うのも当然だ。

そして、そんなチャドの存在があったからこそ、一護は新しい技を会得し、卍解すらも2日で会得することができたのである。

### 『卍解』

一護は、再びチャドと背中合わせで戦う為に強くなった。もちろん、朽木白哉に打ち勝ち、朽木ルキアを救い出す為でもあるが、彼が得た力は自分一人で全てを背負い込もうとする独りよがりのもものでは決してない。

「チャド、お前はこれからも俺の為に殴ってくれ。

俺はこれからも、お前の為に斬る。

”天鎖斬月”…俺はこの力をその為に得たんだ」

黒いロングコートを纏い、卍型の鍔に柄頭に鎖の付いた斬月よりも小型化した漆黒の刀身が特徴の斬魄刀を手を持った一護。これが、一護の卍解だ。

ただ一つだけ…一護の卍解はチャドの記憶にあるものと少し違っているようだ。

「一護…。」

（二気に最終章突入!?!）

柄頭の鎖が長く伸びて右腕の肘付近辺りまで巻き付いた状態になっており、斬魄刀が右腕と融合しているような…。

一護が決死の思いで会得した卍解を目の当たりにし、チャドは戦慄する。

「そ、それが…お前の卍解…なのか？」

（お前もかイイイ!!俺と井上だけじゃなくて、お前も崩玉の影響を受けたのか!?

お前はダメだろオ!崩玉の影響まで受けてどんだけハイブリッドになるつもりなんだよ!?)」

チャドは内心、かつてないほどの発狂状態だ。もしかしたら、茶渡泰虎に転生したことに気付いた時以上の大発狂かもしれない。とにかく叫びたい勢だろう。

「それからチャド…卍解に慣れる為とはいえ、お前とこうして戦うことになるとは思ってもなかったけど、お前が相手なら力を抑える必要もなさそうだ。

天鎖斬月の炎は炎すら焼き尽くすみたいだからな」

「何…だと…?」

漆黒の斬魄刀”天鎖斬月”から迸る黒い何か…いや、これは黒い炎なのか…。

月牙滅尽

全てを滅ぼし尽くす禁断の黒炎。

その黒炎が月牙となり、チャドに容赦なく襲いかかる。

「ツ!」

（う、嘘……だろ!?

親友に放つていいような技じゃないんだけど!? 背中を托けるどころか、俺の霊圧を消す気か!?)

まさかの……チャドも仰天の敵は身内にあり。

一護の放つた炎すらも燃やし尽くしてしまうという黒炎は、”巨人の盾”で跳ね返せるようなものではない。ディアブロ・グアラディアン守護悪魔ですら防ぎきれないだろう。

とはいえ、チャドが焦りを見せたのは一瞬のみ。すぐに平常心を取り戻して真剣な表情を浮かべ、彼は瞳をゆつくりと閉じる。そして、右手を胸元へと持っていていき…。

レチャゾ・ヒガンテ  
巨人の拒絶

右腕の盾 ブラッ・デレチャ・デ・ヒガンテ ”巨人の右腕” からオーラのようないきなり——霊圧のバリアが展開され、

チャドを覆う。それはまるで、チャド中身を護る卵の殻のようだ。

盾で跳ね返せない攻撃すらも……あらゆる攻撃を拒絶して身を護るチャドの絶対防御。

「へへッ、やつぱチャドは凄エな。

「これも防いじまうんだからな」

「一護……今のお前ならば必ず朽木白哉に勝つことができるだろう。俺とお前ならば、必ず朽木を助け出すことができる。井上も、石田も、岩鷲も必ず助け出し、生きて空座町に帰ろう。」

（寧ろ、朽木白哉死んだりしないよな？大丈夫だよな？）

一護の急成長に驚異と脅威を同時に感じているチャド。

もつとも、一護と同様にチャドも脅威的な成長をしているのだが、本人は今一つそれを理解できていない。

本当に、上限知らずの成長を見せる未恐ろしい高校生だ。

「ツ——!？」

（朽木隊長に勝つだど!?!あの人は俺がツ）

そんな2人に対し、阿散井恋次は強い焦燥感を抱く。

この翌日、焦燥感を抱きながら先に向かった阿散井恋次は、己の上司であり、目標でもある六番隊長・朽木白哉と激闘を繰り広げるも、格の違いを見せつけられ敗北することとなる。

目指した相手は遥かに遠く……辛うじて刃は届くも、届いた刃は砕け散り…。

??????????

「チャド、一護…準備はいいか？」

「ああ。いつでも行けるぜ」

朽木ルキアの処刑日当日——運命の日。

俺達の戦いはいいよいよ佳境を迎えようとしている。ここからはまさに未知の世界。

史実通りならば、茶渡泰虎はこの場所にはいない。ほぼ観客のような扱いだ。

しかし、俺は違う。最後まで、夜一さんと一護と共に戦う。それがこの物語にどのような影響を及ぼし、変化するかは俺にはまったく想像も予想もつかない。

もしかしたら、とんでもない事態が待ち受けているかもしれない。この一連の騒動の黒幕から、後ろからいきなり刺されたり斬られたりするのには避けたいが…。

とにかく、やれるだけのことはやった。

さア、囚われの姫を助けに行こう。

チャドの戦う相手が……何…だと!?

処刑執行場所である双☒の丘。

ついに、朽木ルキアの処刑が執行されようとしている。

焰が矛を包み、形を変えていく。巨大な焰の鳥……斬魄刀百万本分に値する破壊力を  
持つ矛”燬王”。

これが、刑の最終執行者だ。

この燬王が罪人を貫くことで、☒刑は終わりを迎える。

処刑に賛同する者、反対する者。護挺十三隊内でも、朽木ルキアの処刑に対して意見  
が大きく割れているなか、それでも刑は執行される。

朽木ルキアはただ、終わりの刻を待つのみ。

「ありがとう……皆。」

さようなら。

（ありがとう、一護）

朽木ルキアは覚悟を決め、死を受け入れた。

大切な存在達への感謝の想いを口にする彼女の瞳から零れ落ちる涙——そしてついに、燬齋王が裁きを与える。



「よう」

「間に合ったようだな……朽木」

数日ぶりの再会……黒崎一護が朽木ルキアの目の前に立つており、その2人の再会を邪魔させまいと燬齋王の一撃を茶渡泰虎が右腕の盾で防いでいる。

「い、一護……チャド……」

彼らは間に合った。

朽木ルキアを助け出すべく、現世で生きる人間の身でありながら尸魂界ソウルソサエテに侵入するという自殺行為に等しい無謀すぎる行動に出て、たった数人で護挺十三隊という大規模な組織を相手にし、数々の死線を潜り抜け、そしてようやくこの場所に辿り着いた。

『男子、三日会わざれば刮目して見よ』とは、よく言ったものである。

尸魂界に侵入したたった数日で、チャドと一護は皮剥けるどころではなく、大きく成長した。しかも、その成長度合いは無限に伸び続ける爪を思わせるほどのもので、彼

らの底はまだまだ見えていない。末恐ろしい潜在能力だ。

「おんやまあ、僕と戦った時と別人じゃないの…」

燬殿王を受け止めたチャドに向けられる隊長、副隊長達の視線。とくに、彼と戦った京楽春水は、たった数日で見違えるほどに成長したチャドの姿に目を見張る。

「七緒ちゃん、チャドくんの後ろにいるのが…チャドくんが言つてた子かな?」

「はい。外見的特徴も、隊員達からの目撃報告と一致します。間違いなく、あのオレンジ色の髪の少年が”一護”という名の者でしょう」

そして、チャドが戦う理由……その存在へ黒崎一護と視線を移し、京楽は目を細める。思慮深い京楽は一護に対して既視感を覚えているようだが、その既視感の真実にまでは気付いてはいない。

「そうか…結局、間に合ったのは僕達じゃなく彼等の方だったって訳か…」

ただ、どこか安堵を覚えているような表情だ。

京楽もまた、朽木ルキアの処刑に対して疑問を抱いていた1人だ。止めてくれたのが己達”護挺十三隊”の死神ではないのは複雑な心境だろうが、それでもこの処刑を阻止するチャンスがやって来たことに……京楽も親友の到着と同時に動き出した。

処刑台の方では、朽木ルキアだけではなく、処刑を妨害したチャドと一護もろとも排除しようと燬殿王が第二撃の体勢へと入っている。

もつとも、チャドは平然とした様子で、一護も燧叢王に大した脅威を感じてはいない様子だ。

「ぬツ!？」

(さて、一護には朽木白哉との戦いのみに集中してもらおう為に他は俺が引き受けるとして、その後はどんな展開になるか——未知の領域だな)

「な、何だ!？」

そんななか……突如、燧叢王に何か巻き付き、丘の方が騒がしくなる。

「よう、この色男。」

遅れて登場するのは色男の性サガかい？随分と待たせてくれるじゃないの」

チャドと一護が下に視線を向けると、京楽が地面に刺さった何かに手を置き、隣には燧叢王に何かを巻き付けた張本人——十三番隊隊長・浮竹十四郎が立っていた。

「済まん。少々、コレの解放に手間取った。」

だが、これで処刑を止められる!!」

地面に切り込みの入った何かを打ち立てた浮竹。

その何かを目にし、それが何なのかをすぐに理解した者は動揺する。浮竹が用意したそれには、四大貴族”四楓院家”の紋が印されていたからだ。

「と、止めろ!」

京楽と浮竹はッ——双匣を破壊するつもりだ!!」

「ええ!?俺がつすか!?!んな無茶な!!」

四楓院家と深い関係のある現二番隊隊長・碎蜂は事態の深刻さをすぐに理解するも、動揺しすぎているのか部下の副隊長に不可能な無理難題を言い渡す。

護挺十三隊の隊長達の中でも古参の2人を相手に、正解すら会得していない副隊長如きが手も足も出るはずがない。赤子扱いされるだろう。その点に関して、部下の方がしつかりと格の違いを理解できているようだ。

そもそも、自ら対処すれば可能性はあつたかもしれないのに……時はすでに遅し。京楽と浮竹が斬魄刀を抜き、打ち立てた板のようなものに斬魄刀を突き刺した。

「ッ——京楽!・浮竹!・貴様等アアア!!」

すると、燬殿王が一瞬で姿を消し、矛へと姿を戻す。

双匣が解除されたのだ。

護挺十三隊の隊長の手によって処刑が阻止される……これは予期せぬ緊急事態。しかし、まだまだこれだけで終わるはずがない。

「チャド、やるぜ!」

「ああ」

「な、何をするつもりだッ、一護、チャド!?!」

処刑台の上に立ったチャドと一護が次の行動に移る。

「む…何をするつもりと聞かれても…」

「決まってるんだろ。」

「今から壊すんだよ…この処刑台をな！」

目を見開き驚愕する朽木ルキア。

「なッ!？」

彼女が驚くのも無理はない。壊せるはずがない物を壊すのだから当然だ。

だが、そんな彼女の様子などお構い無しに、チャドは処刑台の上で屈伸を始め、一護は斬月のサラシを持って勢いよく回している。よく見ると、チャドの靴が膝元にそれぞれ違った髑髏模様が入った灰色のニーハイブーツへと変化している。

「よ、止せ!そんなこと無茶に決まっている！」

「いいか!聞くのだ一護、チャド！」

「この双匣の磔架はッ——」

「うるせエよ…とにかく黙って見てろ」

「朽木…俺と一護を信じろ」

必死に止めようとする朽木ルキアの意見を一蹴し、一護は斬月の柄を掴み処刑台に鋒を突き立て強大な霊圧を一気に放出する。

それと同時に、右脚を上空に向けて上げたチャドは勢いよくその右脚を処刑台に向かつて振り下ろし叩き込む<sup>踵落とし</sup>。

チャドが拳のみでしか攻撃しないと思っていたならば、それは勘違いで錯覚だ。チャドは脚技も使う。

黒と白が混ざり合い、灰色に変化したチャドの脚は腕同様に強大な力を宿している。

ディープロー・テストルクシオン  
滅脚悪魔

チャドと一護の強烈な一撃が朽木ルキアを解き放ち、処刑台を木つ端微塵に破壊する。

その一撃は護挺十三隊だけではなく、<sup>ソウル・ソサエティ</sup>尸魂界を震撼させるほどのものだ。

?????????

少しやり過ぎてしまったかもしれない。

俺の記憶にある一護ですら、双匣の磔架の一部を破壊できていたのだ。今の一護と俺が2人で攻撃したらどうなるか……もう少し真剣に考えておくべきだった。

「チャド……やり過ぎちまったな……」

尸魂界というか、瀨霊廷に於いて双匣の磔架は歴史的建造物でもあるはず。それを木つ端微塵に破壊してしまった。一護も珍しく少し反省している。

俺が憧れるダンディーな男……京楽春水からも、『やつちやったね』と言いたげな憐れみのこもった瞳を向けられている。

しかもさつきから、護挺十三隊総隊長兼一番隊隊長・山本元柳斎重國にガン見されているのだが、俺の戦う相手が総隊長になったりしないか心配だ。明らかに拳骨では済まされないだろう。

ただ、ここからは俺達と護挺十三隊の戦いではない。護挺十三隊内でも処刑に疑問を抱いていた死神達と、上の指示は絶対という頭の固い死神達の内輪揉めのようなもので勃発し、混乱極まる事態へとなってしまう。

一護はこれから、朽木白哉との戦いが控えているが……。

「い、一護、チャド……訊くが……これからいっただいどうするつもりなのだ？」

もつとも、今後の展開を知ってるのは俺のみ。朽木ルキアが助けられたことを喜びつつも、今後の展開を不安視するのは当然だ。

「逃げるに決まってるんだろ」

「なッ!？」

む、無理だ！相手は隊長達なのだぞ!？」

その不安が一護の言葉でさらに強くなるのも仕方ない。一護は全員倒して逃げると強気に宣言してるが、それは俺も不可能だと思ってる。

それに、予想外の展開は必ず起きるはずだ。そもそも、茶渡泰虎がこの場所霊圧が消えていないに存在している時点で、俺の知る物語と何もかもが違っている。総隊長に追われでもしたら、俺も一護も一卷の終わりだ。総隊長とだけは、何がどうあっても戦いたくない。



総隊長とは戦いたくない……そう思ってしまったのがフラグだったのか……。いや、俺はそう思いつつも、心の奥底ではそのような展開になることを面白そうだと思ひ、無意識に望んでいたのかもしれない。

迂闊だった。周囲にいる者の精神に反応し、その願いを叶えるという便利アイテムがすぐ間近にあったのに……。俺の無意識な望みを、それが叶えてしまっていたとしたら

……本当に有り難迷惑である。さすがに、それが原因だとは思いたくないが……  
「瀟靈廷を随分と引つ掻き回してくれたのオ……小童<sup>こわっば</sup>。じゃが、おぬしら”旅禍”の蛮行もこれで終いじゃ」

『万象一切灰燼と為せ』とはよく言ったものである。骨一つ残らないかもしれない。

俺は現在、双匣の丘からかなり離れた場所へと移動し、これから護挺十三隊総隊長兼一番隊長・山本元柳齋重國と戦おうとしている。

唯一の救いは、京楽春水と浮竹十四郎が共にいることだ。

朽木を助け出した後、双匣の丘に朽木白哉に敗北した阿散井恋次が遅れて到着し、一護がその阿散井に朽木をブン投げるといふ暴挙に出たのは俺の記憶通りの展開だった。

そして、朽木を抱えて逃げる阿散井を二番隊長・碎蜂の指示で追う副隊長達——その副隊長達は、一護に代わって俺が一撃で意識を刈り取ったが……。その内の1人の、四番隊副隊長<sup>副隊長</sup>・虎徹勇音さんだけは、かなり手加減した”首トン”にしておいた。あとで機会があつたら謝罪しておこう。

ちなみに、副隊長達に命令した碎蜂は、俺に襲いかかってきたが、颯爽と登場した夜一さんに連れ去られていった。さすが夜一さん……出てくるタイミングが完璧である。

そんなこんなで、一護に朽木白哉との戦いのみ集中してもらおう為に他一切を引き受けたのだが、そこから怒濤の急展開を迎えた。

一護と朽木白哉が戦い始めた後に、俺に向けて重力の如く強大すぎる霊圧が乗し掛かってきたのである。それと同時に、重い拳が俺に襲いかかってきた為に、その拳を”  
ブラッ・デレチャ・デ・ヒガンテ  
 巨人の右腕”で防ぐと、けたたましい轟音が双匣の丘に響き渡った。我ながら、よく防げたと思う。

筋肉ムキムキな上半身を露にした老人に殴りかかれてきたのは人生初だった。しかも、拳を防いだことに驚きつつも、口角を上げてさらに殴りかかってくるという…。京楽春水と浮竹十四郎が助けてくれなかつたらヤバかつたかもしれない。

かつてない身の危険を感じたほどだ。いや、身の危険は今も常に犇々と感じている。場所を移してからは身の危険もだが、それだけではなくとにかく熱い。

「斬魄刀を解放したのも久し振りじゃ」

炎熱系最強にして、最古の斬魄刀が俺に牙を剥いている。

運命とはどこまでも残酷だ。

チヤドが嫉妬される……だと!?

護挺十三隊の創設者、山本元柳斎重國。

「流刃若火」を解放した山じいを前にしてゐるのに、チヤドくんは随分と冷静だねエ」

自ら最強の死神であることを豪語し、全斬魄刀中最高の攻撃力を誇る焱熱系最強にして最古の斬魄刀の使い手。

そんな死神を目の前にして冷静でいれるわけがない。

寧ろ、焦りまくりの動揺しまくりで、一周どころか何周も通り越して感覚が麻痺して冷静に見えるだけだ。

記憶喪失状態に近いかもしれない。とにかく、何が起きて何がどうなってこのような状況になったのか、俺は詳しく語る事ができない。ここはどこ？俺は誰？そんな状況だ。

ただ一つだけ確かなのは……殺らなければ殺られる。それほどまでに緊迫した状況だということだ。

「ま、待てチャドくん!!」

だから、まずはとにかく殴る。

ルヒド・デル・サタナス  
魔王の咆哮

「ぬう!?!」

全ての物質には抵抗が存在する。故に、その衝撃は完全には伝わり切らない。そこに必ず無駄な衝撃が出来てしまうのである。

だが、その抵抗を失くし、衝撃を完全に伝えさせる技がある。その衝撃は凄まじく、けたたましい咆哮となり内部へと響き渡るほどだ。

「す……凄い。」

（元柳斎先生が膝を突くとはッ!

彼はいったい何者なんだ!?!）」

俺はまず、左腕の拳を立てて第一撃を加えた。

「やれやれ。けど、ただ殴っただけではないみたいだね。

（僕と戦った時に見せなかつた技だ……いや、この数日で会得したのかな? まあどちらにしろ、僕は絶対に食らいたくないねエ）」

そして、その第一撃目の衝撃が物質の抵抗とぶつかり合った瞬間に、拳を折って第二撃を入れた。

そうすることで、その第二撃目の衝撃は抵抗を受ける事なく、完全に伝わり切る。

この技は夜一さんから教わったものではない。俺の記憶を基に、茶渡泰虎ならば再現できるのではないかと試してみたところ、本当にできた。やってみるものである。

「何と強烈な一撃じゃ。殴られて膝を突くなど、何百年……いや、千年ぶりかもしれない」

ただ、たった一撃で倒せる相手ではない。総隊長のじいさんは膝を突き、強烈な一撃だったと口にはしているが、膝を突いたのが芝居なのではないかと思えるほどにピンピンしている。

そもそも、最初から効くとは思っていなかった。逃げ切れないと思い、致し方なしで先手必勝の攻撃をしたのだが、それでも少しくらいは効いてくれても良かったのではないだろうか……。いや、俺の鍛練不足が一番の原因だろう。

総隊長のじいさんは遙か先——とにかく強い。

「久しぶりに拳が滾つとるわッ——ぬうん!!」

解放した斬魄刀“流刃若火”を地に突き刺し、拳での戦闘に切り換えてきた。しかも、当然ながら狙いは俺。最強の死神とタイマンなど笑えない。

流刃若火から発生した炎が辺り一面を炎で包み込んでおり、デスマッチを味わって

るような気分だ。

果たして生き残ることができらるだろうか……。もし生き残れたら、夜一さんからのご褒美は増し増しの増し増しくらいでないかと割り合わないと思う。

「小童…名乗ってみい」

死に行く俺の名を尋ねるとは意外にも律儀だ。俺の霊圧は、気分的にすでに消えかけているというのに…。

まだ死にたくない。夜一さんからのさらなるご褒美を頂いていないのに、ここで死にたくはない。

「茶渡泰虎か…実に男らしく、素晴らしい名前じゃ。」

覚えておくとしよう」

死にたくないが、総隊長のじいさんの物言いは確実に命を刈り取るつもりだ。

片手の拳骨では俺を仕留めきれなかったこともあり、総隊長のじいさんは両手の拳骨で俺を仕留めるつもりらしい。

もつとも、そう簡単に俺の命をくれてはやらない。俺は運命に抗い…：反発する。

レブルシオン・ヒガンテ  
巨人の反発

総隊長のじいさんの双骨を盾で受け、全力を持ってその拳を弾き返すと、総隊長のじいさんは目を見開いて驚愕していた。だが、まだまだこれだけではない。驚くのはまだ早い。

「む?!」

（僕の双骨を弾き返した…じゃと?!）

俺の右腕の盾…：手の甲の部分から槍の穂が伸びて盾と槍が一体化した状態へと変化する。皮膚を媒介とした俺の能力の真骨頂というべきだろうか…。

「戦いの中で…：その戦いが壮絶なものであればあるほど強くなっていく。若さの勢いつてのは本当に恐ろしいね。」

山じいに膝を突かせただけでも凄いの、さらにもう一発…：追い討ちをかけるなんて」

そして、拳を弾き返された総隊長のじいさんは体勢を崩しており、俺はその瞬間を絶対に逃さない。恐らく、こんな状況は二度と訪れないだろう。千載一遇の大チャンスだ。

間合いの無いこの状態から腹筋、胸筋、背筋、両腕等上半身の撥条はねのみで瞬時に極限まで振りかぶった穂を総隊長のじいさん目掛けて繰り出す。

この技は、俺の技の中でもとくに威力が高いものだ。

敵と見なした相手には容赦なく、即座に葬る。悪・即・斬である。もつとも、総隊長のじいさんは実のところ敵ではない。こうでもしないと、俺の命霊圧が消えるが終わるから致し方なくである。

最強の死神相手にどこまで痛手を負わすことができるか…。  
これが、今の俺の全力だ。

コルミージョ・ヒガンテ  
巨人の牙・零式

俺は茶渡泰虎。

今まさに命尽きようとしている高校生である。

?????????

茶渡泰虎が護挺十三隊総隊長兼一番隊隊長・山本元柳斎重國を相手に一矢報いている

頃……

「この霊圧はまさか!」

(総隊長が斬魄刀を解放したじゃと!? しかも戦っておるのはッ——チャドか!?)

「私を相手にしながらよそ見とは随分と余裕だな…夜一」

四楓院夜一は現在、自身の後継者でもある二番隊隊長兼隠密機動総司令官の碎蜂と激闘を繰り広げていた。正確には、夜一が圧されている状況のようだ。

しかし、総隊長が斬魄刀を解放したのを感じ取り状況が一変する。

総隊長と戦っているのがチャドであることに気付き、夜一はいつになく動揺してしまっている。

「くッ、碎蜂ッ! 邪魔をするでない!!」

「先に邪魔してきたのは貴様ではないかッ、夜一!!」

チャドならば大概のことを自分で解決できるだろうと、夜一はチャドの力を誰よりも知っており信用しているが、今回ばかりは相手が悪すぎた。

夜一が動揺するのも無理はない。

「どけ碎蜂! 儂はチャドのもとに向かう!!」

「き、貴様ア! 私の邪魔をした挙げ句、私と戦っている最中に男の心配をするとはいったいどういうつもりだ!?!」

そんな夜一に対して、碎蜂が激昂するのは仕方ない。ただ、碎蜂の怒りはどこかが少

し違うような気がする。男の子が好きな女の子にちよっかいを出しているような……とにかく自分だけを見ろと言いたげな、そんな様子に見えてしまうものだ。

「私を見ろッ——夜一!!」

動揺してチャドのもとに向かおうとする夜一に対して、碎蜂は嫉妬に狂ったかのように己の本心を口にしてしまう。

「どかぬというなら仕方ない。

すまんが碎蜂……一瞬で終わらせる!!」

瞬間

長らく戦線から離れて、101年ものブランクがあつた影響か碎蜂相手に劣勢に立たされていた夜一だったが、チャドの危機を感じ取ったことで夜一が本気を見せる。

夜一は本来、碎蜂を相手にこの技を使用するつもりは一切なかったようだ。

しかし、今はそうも言つてられない状況。

「何……だとツ!？」

(そ、それは、私が血反吐を吐く思いで修行して会得した奥義!!)」

夜一は高濃度に圧縮した鬼道を両肩と背に纏っている。これは、高濃度に圧縮した鬼

道を炸裂させ、己の手足へと叩き込んで戦う白打の最高術だ。

この技を使用すると、両肩と背の布が弾け飛び、背中が剥き出しの状態となり、夜一のセクシーさが一段と際立っている。きつと、チャドが喜ぶことだろう。

しかし、そのチャドは危機的状況だ。

夜一にとって、碎蜂はかつての部下であり妹分のような存在でもあった。だが、どちらかを選ばなければならないこの状況で、夜一が選ぶのは当然——チャドのようだ。

「な、何故だ！

何故お前は私の前に立ち続ける!?

（ようやく再会することができた…それなのにどうしてだ!?!何故、私から奪うのだ!また離れていくのですか!?)

浦原喜助といい、チャドという旅禍の男といい…私から夜一様を奪う男は抹殺してやる!!

だからッ——)

そんなかつての上司であり、実際のところは今もなお敬愛してやまない夜一に対して、碎蜂は思っていることと言っていることがまったく違う状態だ。精神的にかなり追い詰められてしまっている。

「すまぬ…碎蜂」

総隊長と戦うチャドを心配し、一刻も早くそちらに向かいたい夜一は、碎蜂の顔面すれすれの位置で拳を止める。

勝負は決した。

もはや、碎蜂に勝ち目はなく、彼女はこれ以上……戦う意思を保てずにいる。

ただ、敬愛する夜一にまたしても置いていかれてしまうことだけは決して受け入れられないらしく、碎蜂の頬を涙が伝っている。

「私を……置いていかないでください——夜一様」

碎蜂は自身の切実なまでの想いを告げ、地に崩れ落ちてしまう。もはや、彼女には夜一を討伐する気など一切ない。いや、もしかしたら初めからなかったのかもしれない。

碎蜂は101年前に夜一に裏切<sup>置いていかれて</sup>られてしまった。それでも、碎蜂は敬愛する夜一を指してこれまで歩んできた。

夜一と再会した時に、誉めてもらう為に。

だが、その機会をまたしてもを男に奪われてしまった。

「碎蜂……儂はチャドのもとに向かう。

じゃが、すぐに101年前の真実が明らかになるじやろう。その時に、ゆっくりと話をしよう。約束じゃ」

夜一は碎蜂にそのように告げて、チャドのもとに向かつていつてしまった。

その場に、1人残されてしまった碎蜂は俯いている。だが次の瞬間、彼女は地面を激しく殴った。

碎蜂は涙を流しながらも、その表情は怒りに満ち溢れている。

「チャド……私から夜一様を奪う極悪非道な男。

浦原喜助共々、私がこの手で必ず葬ってやる」

そして、碎蜂の心に灯ってしまった業火の炎。

茶渡泰虎は、知らぬ内に隠密機動総司令官に狙われる。



双匣の丘にて死闘を繰り広げる黒崎一護と朽木白哉。

「総隊長が斬魄刀を解放したか……」

黒崎一護……どうやら、お前の友は直に死ぬようだ」

「ハッ！確かにとんでもねえ霊圧を感じつけど、アンタは何もわかってねえ……チャドは絶対に負けねえ！」

それより、よそ見してる余裕なんてねえぞ!!」

## 月牙螺旋衝

「!？」

朽木白哉が茶渡泰虎の死亡宣言を口にしているが、一護はまったく動揺することなく、朽木白哉に月牙を纏った斬れる竜巻を放つ。

一護の攻撃に驚愕した朽木白哉は、まともに食らったらただでは済まないと判断し、“瞬歩”でその場から退避する。

朽木白哉と三度目の戦い。一護にとってはリターンマッチであり、三度目の正直だ。それ故に、一護の気合いの入りようは凄まじいものがある。

「今のは……何だ？」

それが、貴様の斬魄刀の能力か？」

「俺の霊力を刃に喰わせて刃先から超高密度の霊圧を放出して斬撃を巨大化させ、それを飛ばす……それが月牙天衝。」

今のは、斬撃を竜巻に変化させて月牙天衝を纏わせた。まあ、俺の斬月の能力は、霊力を食わせることで様々な形状に変化させて霊圧を放出するつてとこだ」

この瞬間の為に……朽木白哉に勝つ為に、一護は厳しい修行にも耐え、一護は斬月の真の能力を解放できるまでに至り、さらには卍解まで会得した。

「天を衝く……か。大それた名だ」

「へッ、それくらいやれなきやルキアは助け出せねエからな」

「そう口にした一護は斬月を前に突き出し……鋒を朽木白哉に向け、左手を右手首に重ねて強大な霊圧を迸らせる。」

この場所にチャドがいたならば、きつと感動していたことだろう。今の一護は朽木白哉に対して『卍解しろ』などと舐めた言葉を決して口にはせず、慢心などまったくせず、に全力を持って勝つつもりだ。

「感謝するぜ、朽木白哉。」

俺がこの力を得ることができたのはアンタのおかげでもあるからな！」

卍解

数億に及ぶ刃を……漆黒の斬魄刀が打ち砕く。

チャドが再びツッコむ……だと!?

場所は清浄塔居林。

ここは、ソウル・ソサエティ尸魂界の最高司法機関”中央四十六室”の居住区域で、完全禁踏区域。

本来、護挺十三隊の隊長であろうとも足を踏み入れることなど決してできない場所だ。

瀨靈廷の至る所で激しい戦いが勃発してしまっている現在、完全禁踏区域であるこの場所に数名の死神が足を踏み入れてしまっている。

これは明らかに重罪。しかし、その罪を裁くはずの中央四十六室は……もう存在しない。

何者かによって皆殺しにされてしまっている。それも、ここ数日の間にはない。いつたい誰の手によって…。

「あ、あ……ほ、本当に……藍染隊長……なんですか?」

今この場所にいる一人……五番隊副隊長・雛森桃。彼女は、とある人物に言われるがままに連れられてこの場にやって来た。何故、完全禁踏区域であるはずのこの場所に連

れられて来たのかすら、彼女はまったく把握できてはいない。

ただ、この場所で今もつとも会いたかった人物に再会したことで、彼女は感極まって大粒の涙を流している。

その先にどんな運命が待ち構えているのかすら知らずに……

数日前に殺害されたはずの人物——五番隊隊長・藍染惣右介。雛森桃が誰よりも慕い、憧れ、彼無くしては生きていけぬほどにまで心酔する理想の上司。

その藍染惣右介が実は生きていた。とある目的の為に死を装い、雛森桃を含むほぼ全ての死神達を欺き、身を隠していた。

雛森桃にとって、最初こそ困惑すれど、これほどまでに嬉しい再会はない。藍染惣右介に抱き締められた彼女は、すぐに本物であることを理解する。

藍染惣右介が生きていたことに深く感謝している。

「……いいんです。藍染隊長が生きて下さっていただけで……それだけで私は……」

藍染惣右介の腕の中で雛森桃は安堵し、これまでの絶望が嘘だったかのように穏やかな表情を浮かべている。

だが、事態はそんな単純なものではなく複雑であり、藍染惣右介による自らの死の偽装工作も緻密に練り上げられた想像を絶する計画の一つだ。

中央四十六室の暗殺もその内の一つ。

「ありがとう雛森くん。」

僕は、君のような部下を持って本当に幸せ者だ。ありがとう雛森くん。本当にありがとう」

雛森桃は……いや、誰もこのあとに訪れる絶望を知らない。

「さようなら」

華奢な女の子を絶望の凶刃が貫き、いよいよ一連の騒動の真の黒幕が動き出した。

これはまるで、決して開けてはならないパンドラの箱が開けられてしまったかのような……そんな事態に近いかもしれない。

胸を容赦なく突き刺され崩れ落ちた雛森桃に向ける藍染惣右介の表情は理想の上司のものではなく、冷徹で残忍……本当に藍染惣右介なのかと疑ってしまう。

いや、この表情こそが藍染惣右介の素なのだろう。

雛森桃はもう用済みの存在でしかなく、その場所に放置している。藍染にとって、便利な使い捨ての存在でしかなかったということだ。

「行こうか……ギン」

「はい……藍染隊長」

その藍染が唯一、己の副隊長として認めた死神……雛森桃をこの場所に連れてやって来た市丸ギンは、事の成り行きをただ見ているだけで、藍染に従い後ろを歩いている。

「少し想定外が起きているが、取るに足らない問題だ」

藍染はもう、素を隠すつもりは一切ない。

護挺十三隊の死神達が知っている藍染惣右介は、本当は存在していなかったのだ。

”崩玉”を手にし…私が天に立つ”

それから間もなくし、瀟靈廷に激震が走る。尸魂界ソウル・ソサエティが混沌に包まれてしまう。



「ば…馬鹿な…藍染が…嘘…だ…」

護挺十三隊にもたらされた凶報。

四番隊副隊長・虎徹勇音が”天挺空羅”にて、藍染惣右介の裏切り…藍染惣右介の

真の姿を全隊長、副隊長に告げた。

藍染惣右介は自身の部下である雛森桃に手をかけた後、その場所にやって来た十番隊隊長・日番谷冬獅郎にまで手をかけた。そして、藍染の死に疑問を抱いていた四番隊隊長・卯ノ花烈が虎徹勇音を連れ現れたことで明らかになった藍染惣右介の真の姿と、恐るべき真の力斬魄刀。

そして、敵対関係にあったはずの”旅禍”——茶渡泰虎達にもそれが告げられた。

「ついに動き出したようじゃな…藍染」

チャド以外で唯一、事の真相を知っていた夜一はついに藍染が動き出したことに険しい表情を浮かべている。彼女は二番隊長・碎蜂と戦っていたが、チャドの危機を感じ取り、チャドのもとに颯爽と駆けつけていたようだ。

ただ、夜一の行動は火に油を注いだようなもので、護挺十三隊を裏切った夜一が姿を見せたことで総隊長は怒りを露にし、つい今しがたまでチャドと夜一 VS 総隊長・山本元柳斎重國という図が仕上がっていたところである。

ある意味で、藍染の凶報はこの戦いによる被害…：瀰霊廷を滅亡の危機から救った朗報のようなものでもある。何故なら、総隊長は卍解しそうになっていたのだから…。

「山じい…：僕達こんなことしてる場合じゃないんじゃない？」

思慮深い京楽春水はどこか納得したかのような、長年の胸のつかえが解消したかのような表情を浮かべながら、総隊長に向けてそう口にする。

「…：そのようじゃな。」

茶渡泰虎、仕方ないが一時休戦じゃ」

総隊長も、さすがにこの事態に動きを止め、京楽の言葉で流刃若火を収め…。

護挺十三隊内で勃発した内輪揉めも、全てが藍染惣右介の掌の上だった。総隊長がこんな場所で、身内同士で戦っているわけにはいかない。況してや、卍解など以ての外だ。

もつとも、チャドは身内でもなんでもないのでが…、とにかくこれ以上は戦いたくないだろう。

「ああ。」

（一時休戦じゃなくて、もう二度と戦いたくねエよ！

つか、まだ戦うつもりか!?）」

「チャド、大丈夫か？」

総隊長から執拗に狙われ、誰よりも傷だらけのチャドを心配する夜一。ただ、総隊長を相手に五体満足で生きているのは称賛されるべきだ。

夜一が助けに来てくれなかったら、彼女だけではなく京楽と浮竹がいなかったら死んでいた可能性は高いが…。いや、間違いなく死んでいただろう。

「とりあえず、なんとかか…」

「よく頑張ったのお。イイ子じゃ」

「!?」

（唇じゃなかったア！けど、これはこれでアリ!!）」

このような事態だが、頑張ったご褒美といわんばかりに、夜一はチャドの体に飛びついて頬に口付けをし、当然の如くチャドにお姫様抱っこされている。

「おんやまあ…あの四楓院家初の先代女性当主がねエ。面白いものが見れたよ」

これから、チャド、夜一、京楽、浮竹、総隊長達は藍染のもとへと向かう。今この瞬間は、ほんの一瞬だが態勢を整える為の束の間の休息…。

総隊長と戦っていたのだから、ほんの少しでも身を休めておくべきだ。

「貴様アアア!夜一様から離れるオオオ!」

ただ、予期せぬ事態は常に起きる。

「碎蜂?!」

「夜一様!その男はケダモノです!汚されてしまいます!私があなを姫様抱っこしますので今すぐこちらに!!」

『 卍解・雀蜂雷公鞭』!! 』

すぐに夜一様を放せ!夜一様を放したら撃ち殺してやるから、とにかく早く放せ!」

「……………」

チャドは思った。『コイツ、よく隊長になれたな』と…。

「やめんかバカ者」

「あぐツ!!」

急に現れた碎蜂に総隊長の拳骨制裁が落とされ事態は収まるも、チャドは深いため息を吐き出した。

「ねえさまアアア!」

ついにようやくツ——ねえさまの無実を証明する日がやって来ましたよ!!」  
 「はあ……何をしておるのじゃ、夕四郎」

そしてもう一人登場し、緊張感がもはや台無しである。

尸魂界はこれで大丈夫なのだろうか、チャドがそう思うのも無理ないが、これも全てチャドの影響なのだから、これからチャドは馬車馬の如く頑張らなければならない。

?????????

場所はもちろん双匣の丘。

茶渡泰虎と黒崎一護によって木っ端微塵に破壊された双匣の磔架やら、黒崎一護と六番隊長・朽木白哉の激闘の爪痕が色濃く残るその場所にて、この一連の騒動は佳境を迎えていた。

四大貴族”朽木家”現当主の義妹とはいえ、席官でもない朽木ルキアの処刑が何故これほどまでに大きな騒ぎを引き起こした要因となってしまったのか……。もちろん、黒崎一護や茶渡泰虎達が尸魂界に侵入したのもあるが、それは全てが計画の内の一つ。

「これが……崩玉」。

驚いた。こんなに小さいモノだったとは」

朽木ルキアの魂魄内に埋め込まれた小さな物質——”崩玉”。

すべては、藍染惣右介がその物質を手に入れる為の策略だったのである。

「……」

浦原喜助め。万が一の時：私が崩玉を手に入れた時を考え、崩玉を破壊することはできなかったが崩玉の一部を欠けさせることには成功したか……。

だが……まあいい。ほんの一欠片程度だ。あとで回収すればいい」

すべてが上手く、計画通りに事が運んだわけではないようだが、藍染惣右介は目的の崩玉を手に入れてしまった。

当初は処刑によって崩玉を手にする計画だったらしいが、茶渡泰虎と黒崎一護によってその計画は打破されてしまい、藍染は自らの手で朽木ルキアから崩玉を取り出す方法に出たようだ。

「ギン……殺せ」

つまり、もう彼女は用済みということ。

藍染の部下である市丸ギンが斬魄刀を抜き、朽木ルキア目掛けて刀身を伸ばす。

朽木白哉に余力を残して勝利し、事の真相を知り朽木ルキアを助ける為に駆けつけた

黒崎一護も、藍染の強大な力の前に敗北。内に秘められた忌まわしき力が覚醒するも、藍染はその力すらも難なく斬り伏せ、一護は戦闘不能状態に追い詰められてしまった。

朽木ルキアを抱え逃げていた阿散井恋次も同じくだ。

藍染の裏切りを知り、激昂して乗り込んできた七番隊隊長・狛村左陣も手も足も出ずに一撃のもとに沈められてしまった。

今この場所に朽木ルキアを救い出せる者は誰も……。いや、たった一人だけいた。一護との激闘で満身創痍になりながらも、朽木家当主としての誇りよりも義妹を優先させることを決意した人物が……。

「に……兄様……？」

市丸ギンの刃をその身に受けながらも、義妹を救い出したのは……朽木白哉であった。

ただ、先の戦いですでに限界を迎えていた朽木白哉に、もう戦える余力は残ってはいない。市丸ギンの凶刃の前に崩れ落ちてしまった。

「兄様ッ!？」

（私を助けたばかりにッ！）

兄様も、恋次も……一護も！皆が傷ついてしまった！私が弱いばかりに、皆に守られ、皆が傷つくばかりだ！

私をもっと強ければ!!」

ただ護られるばかりの朽木ルキアはこの状況で、己の無力さを心から呪い、今は力を強く望んでいる。とはいえ、迫る脅威は止まることなく迫り…。

「や、やめろオオオ!!」

すると次の瞬間、朽木ルキアの望みが届いたかのように、この数ヶ月間まったく戻ることのなかった彼女の死神の力が戻り、彼女は死覇装に身を包んでいた。

『舞え・袖白雪』

辺り一面が白く美しい雪に覆われる。



双匣の丘は現在、真っ白……一面が雪に覆われている。俺が到着すると、この有り様だ。

朽木ルキアの斬魄刀“袖白雪”の刀身が雪へと変化し、一護達重傷者は、彼女が作った“かまくら”で保護されていた。

袖白雪ってこんな能力だっただろうか…。確か、真の力は”所有者自身の体温を氷点下以下にする”だったはずだ。決して、朽木白哉の”千本桜”のように刀身が消えて雪に変化したりはしなかったはず。

「今度は私が皆を護る!!」

どうやら、朽木ルキアも望んでしまったらしい…。力を…。

そして、崩玉は律儀にもその望みを叶えてしまったようだ。

お前もかよ、朽木イ。

チャドが天に立つ……だと!?

白く美しい雪に覆われた双匣の丘。

刀身が雪へと変化した朽木ルキアの斬魄刀。失っていたはずの力が今この瞬間に目覚めた。

それはきつと、大切な存在を護りたいと強く思う彼女の心に……望みに強く反応したのだろう。そして、彼女に強力な力を与えてくれた。

「ほう、死神の力を取り戻したか。

だが、君が力を取り戻したところで意味はない。蟻が一匹増えた程度だ」

しかし、勝てるかどうかはまったく別の話だ。この状況に、今回の一連の騒動の首謀者である藍染惣右介は驚きつつも、至って冷静に斬魄刀を一閃する。

藍染の太刀筋をルキアはまったく見切れていない。

せっかく死神の力を取り戻しても、藍染の言葉通り……ルキアの力では護ることなどできない。相手が藍染でなければ、もしかしたら可能性はあったかもしれないが、運命はどこまでも残酷だ。万に一つの可能性もない。

それはつまり、朽木ルキアはどうあっても死ぬべき運命にあるということなのだろうか…。

迫る凶刃は容赦なく無慈悲だ。

「…」

だが、その刃が朽木ルキアに届くことはなかった。

「ま、間に合った…か。」

（な、なんつー斬撃してんだよ!? 右腕が斬り落とされるかと思った…やっぱこの人、パネエよ!!）」

「チャ、チャド!?!」

藍染の刃から身を挺して防いだのは、ルキアを救い出すべく尸魂界ソウル・ソサエティに乗り込んできた人間の1人——茶渡泰虎である。身を挺してといっても、右腕の盾で防いでおり、御力の高さは相変わらずだ。とは言え、藍染の斬撃はチャドの想像を遥かに超えたものだった。たつた一太刀防いだだけで、一生分の運を使いきったかと思うほど…。

「待っていたよ茶渡泰虎。」

総隊長と戦ってその程度の傷で済んでいるとは大したものだ」

そのチャドを心待ちしていたらしい藍染は、不敵な笑みを浮かべながら、間髪入れずに次の攻撃を仕掛ける。

「!?」

藍染の掌で渦巻く黒い靈力にチャドは驚愕する。

同じ隊長格をたった一撃で仕留めたほどの鬼道。しかも、詠唱破棄で放たれたそれは、本来の破壊力の三分の一も出せていないとのことだが……普通に考えて、人間に放つものではない。

つまりはそれだけ、チャドを評価しているということか…。

『破道の九十・黒棺』

九十番台の鬼道を詠唱破棄で扱える死神は、同じ隊長格でもほとんどいない。藍染でも三分の一の破壊力しか出せないということは、それだけ扱いが困難であるということ。

もつとも、タフなチャドがこれを受けてどうなるかは定かではないが、ルキアはただではすまないだろう。

「え!？」

黒い直方体状の重力の奔流が囲うなか、チャドは咄嗟にルキアを抱き寄せる。

予想外のチャドの行動に驚くルキアではあるが、これは致し方なし。チャドにはこうすること以外に彼女を護る方法がなかったからだ。

レチャツ・ヒガンテ  
巨人の拒絶

あらゆる攻撃を拒絶して身を護るチャドの絶対防御。

このバリアによって、チャドは抱き寄せたルキアを黒棺の脅威からどうにか護り抜いた。

「ふッ、詠唱破棄した黒棺とはいえ、これを防ぎきるとは…総隊長を相手に生き延びただけはある」

藍染もチャドを絶賛するほどだ。

だが、チャドは理解してしまった。藍染の強さを…己との間に、どれだけの差があるのかを…。

「チャ、チャドッ、大丈夫か!？」

「はあ、はあ…く…そッ…(本気で…死ぬかと思った!今ので来世の運まで使いきったんじゃないエかな!?)」

どうにか己とルキアの身は護れたが、たった一撃防ぐだけで大量の霊力を消費したのである。

地に膝を突き、もはや限界ギリギリだ。

「だが、私に君の拳は届くことはなさそうだ。」

もう限界のようで残念だよ、茶渡泰虎」

もう戦う力は残ってはいない。そもそも、つい今しがたまで護挺十三隊総隊長・山本元柳斎重國と戦っていたのだから、それも当然だろう。

一見、チャドが防戦一方の状況ではあるが、寧ろよく藍染の攻撃を二度も防げたものだ。

己の力に絶対的な自信を持っている藍染は、だからこそチャドを高く評価している。

「茶渡泰虎。

私を楽しませてくれた礼だ」

藍染はチャドをこのまま始末するつもりらしく、鬼道を放った際に鞘に戻していた斬魄刀の柄に手を伸ばしている。

「く……そ……」

この状況……チャドが生き残る為に残された道は、たつた一つしかない。

「ッ!?

(は、早く来てくれ!

そ、それから……きつとこれが最後のチャンスだ!

”崩玉”!お別れする前に最後のお願いだ!)」

ただ、こんな限界ギリギリの危機的状況でも、チャドは忘れることはない。やること

はちやつかりきつちりとやる。

この男は死靈圧が消えないなない為に、どこまでも貪欲だ。

チャドの心の内は藍染にもわからない。そもそも、チャドが崩玉の真の力を理解した上で行動し、そのおかげでここまでの力を手にしたとは藍染ですら思うまい。予想の遙か斜め上をいつているはずだ。

藍染だけではなく、チャドとイイ感じになりつつある夜一ですらも、親友の一護ですらも、茶渡泰虎という男が靈圧が消えない為に必死に行動していることを知らない。

藍染惣右介という強大すぎる敵を前にしても、内心で慌てふためいてこそいるが、チャドは決してブレない。

如何に危機的状況でも……いや、だからこそなのだろう。チャドは強く望む。

チャドが崩玉に願ひ事をしてることなど知るはずもなく、藍染は鞘から斬魄刀を抜こうと柄に手を添える。

「人間にしては、君達は実に面白い存在だった」

そして、チャドだけではなく、立つことすらできない重傷を負わされた黒崎一護にも向けてそう告げる藍染は、その一護の視線の先でチャドにトドメを刺すつもりだ。

無慈悲な凶刃がチャドへと迫ろうと……だが、その凶刃がチャドの血を浴びることはなかった。

「動くな、藍染。チャドに手出しはさせん」

「よ、夜一…:さん。」

(このタイミングの良さと風格…:マジで惚れちまう!)

颯爽と登場し、藍染を動きを封じた夜一。その姿に、チャドは惚れ惚れとしている。

「茶渡泰虎を殺してから大人しくしろ」

ただ、夜一ともう一人…:おかしなのがついて来てしまっているが…:。言動が明らかにおかしい。

斬魄刀に伸ばされた藍染の腕に布を巻き付けることで抑え込んでいる夜一と、首に斬魄刀を当てる碎蜂だが、碎蜂の敵意は藍染だけではなくチャドにも向いてしまっている。

こんな状況だろうと、夜一至上主義は絶対に変わることはないようだ。その執念は凄まじく、恐ろしさすら感じてしまうが、チャドは心の中でこう呟く。

『1001年前…:夜一さんがいなくなつた時に頭のネジも喪つたんだな。だからポンコツなのか…:可哀想に』

「碎蜂」

どうやら、そう思ってしまったのは夜一も同じらしい。己の妹分が、まさかこんな残念に成長してしまうとは想定外のようなのだ。しかし、今は碎蜂のことなど後回しだ。

宿敵——藍染惣右介を討つ絶好の機会。

「こほん……おぬしの計画もこれで終いじやな、藍染」

夜一が気持ちを切り替えたのと同時に、双匣の丘に続々と到着する隊長、副隊長達。

藍染は夜一と碎蜂が抑えており、部下の市丸ギンと東仙要も斬魄刀を首筋に当てられている。

形勢逆転。

さすがの藍染でも、総隊長を含む隊長達を相手に勝つことはできないだろう。

101年前——いや、それ以前から藍染が用意周到に画策していた計画もこれで終わ

り、戸魂ソウル・ソサエティ界に平和が訪れることとなる。



平和が訪れる……はずだった。

しかし、そうは問屋が卸してくれない。そもそも、藍染がこの程度で終わるはずがない。もしここで終わりなのならば、ここまで事は大きくなっていないはずだ。

「大虚メソスとまで手を組んだのか……いったい何の為にだ」

一見、藍染とその部下達——市丸ギンと東仙要は追い詰められているように見えた

が、藍染は死神の敵であるはずの虚ホロウすらも従えていた。

しかも、虚の中でも上位種の虚が藍染の支配下にあり、藍染達は“反膜ネガシオン”という光に包み込まれ、この場から離脱してしまう。この光に包み込まれたが最後、光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶された世界となり、触れることすらできない。

”崩玉”を手に入れた藍染に、もうこの場所にはまったく用はない。

「ふッ——高みを求めて」

「そこまで…地に堕ちたか、藍染」

去り行く藍染に問いかけた浮竹十四郎は藍染の返答に表情を歪め、藍染を強く非難する。

「傲りが過ぎるぞ、浮竹。」

初めから、誰も天になど立ってなどいない」

対して藍染が浮竹にそう返すと、トレードマークであった眼鏡を粉々にして髪型をオールバックへと変え宣言する。

「だが、天の座の空白も今日で終わりだ。

これからは…私が天に」

ただ、藍染の宣言はけたたましい轟音によって遮られてしまう。その轟音は、反膜ネガシオンと何か衝突し合うことで起きた音だが、本来は死神が触れることすらできないものだ。

ならばいったい何が——誰が何をしたのか…。

「い、いったい何をしておるのじゃチャド!?」

「む…夜一さんを苦しめる敵をこのまま逃がすのもどうかと思っただが…。

（何か知らないけど霊力があつという間に回復したし、何か知らないけど力が内から沸き上がってくる。

それに、茶渡泰虎の力は虚の力に近いものだ。それなら…この拳ならこの光にも干渉できるはずと思っただが…）」

ルヒド・デル・サタナス  
魔王の咆哮

ブラッ・イスキエルダ・デル・ディアブロ  
死神が触れることすらできない光に、チャドは自身が導き出した考えを信じて”

悪魔の左腕”を叩き込む。

総隊長・山本元柳斎重國に膝を突かせた一撃だ。

「チャド」

そんなチャドの勇ましい姿を、惚れ惚れとした様子で夜一は眺めていた。

「何…だと…」

そして、その光に僅かな輝が入っており、藍染もその輝を凝視している。

「む、硬すぎる。

(どうやらオレの考えは間違つてはいなかったらしい。けど、今の藍染が相手ならこの光の中からどうにか引き摺り出して、あとは総隊長達がどうかしてくれると思つたけど、やはりそう上手くはいかないか…。

触れることはできたし、輝は入ったけどこの程度だ。割るのに何時間…下手したら一日かけても割れないかも)」

チャド自身は粉碎できなかったことに悔しさを覚えているが、そもそもチャドの行動は死神達からしたら常軌を逸している。いくら特別な力を持った人間といえど、まさか干渉不可能な隔絶された世界に踏み込もうとするなど予想外だったはずだ。

とは言え、ネガシオン反膜にすら輝を入れたチャドの力を、誰もが認めたくはずだ。

「茶渡泰虎…君は見ていて飽きないな。

面白いものを見せてもらった…ありがとう」

藍染もチャドに対する認識を再び改めている。

チャドはこれから、間違いなく大きな渦に巻き込まれてしまうだろう。少しだけだが、過程を変えてしまったのだから、それは当然の結果で致し方なし。

迂闊に行動するべきではなかったと痛感しているはずだ。

表情こそ平静を装ってはいるが、内心は調子に乗ってしまったと悔いていることだろ

う。

「また会う日を楽しみにしているよ」

藍染は不敵な笑みをチャドに向けて、闇の中へと消えていく。

こうして、尸<sup>ソウル</sup>魂<sup>ソサエティ</sup>界を震撼させた大事件は東の間の終息を迎える。

しかし、茶渡泰虎にとっては一時も気が休まらない日常の始まりとなってしまうた。

「……」

（ああ……どうしてこう余計なことしちゃうかな……オレ）」

チャドは知らない。

藍染がその行方を追っている”崩玉の欠片”が、いつの間にもやらの魂魄と融合してしまっていることを……。これまで、身近でここまで強く求めてくれた者が存在しなかった崩玉は、チャドに求められることに悦びと嬉しさを感じるようになり、チャドが最後のお願いを望んだ時、別れを寂しく感じたのだ。

その結果、崩玉は自身の一部<sup>欠片</sup>をチャドの魂魄へと轉移させて融合したのである。

困難に立ち向かうこの男の歩む道を最も近くで見続け、力になりたいと思ひ……。

チャドは知らない。

己がもう、噛ませ犬などではないことを……。

チャドが挟まれる……だと!?

藍染惣右介の起こした反乱によって、尸魂界ソウルソサエティは大きな打撃を受けてしまった。

しかし、これはまだ序章にしかすぎない。

大虚メノスと手を組んだ藍染の戦力は未知数。この戦いは、ここから先より熾烈化していくはずだ。

そして、その戦いに人間も巻き込まれ……間違いなく騒動の中心となってしまうだろう。

「チャド、本当に頑張ったのう。

おぬしと一護がいなければ、どうなっておったことか」

茶渡泰虎と黒崎一護。

藍染が関心を抱くこの2人は、間違いなく藍染との戦いに身を投じることになるはずだ。

寧ろ、彼らこそが藍染に対抗する為の切り札になるかもしれない。

チャドと一護をここまで導いた夜一は、そう確信している。

「夜一さんのおかげだ。」

夜一さんが鍛えてくれて、ここまで導いてくれたから俺達は朽木を助け出すことができた。全員生き残ることができた。

本当にありがとう、夜一さん」

「おぬしは本当にイイ男じやのう。」

（儂も喜助と同じで、おぬし達に真実を隠しておつたというのに……おぬしはそれに気付いておるはずなのに。）

やれやれ、儂はおぬしに本気で惚れつつあるかもしれないのう)」

藍染の反乱から一夜明けた早朝。

チャドは尸魂界ソウル・ソサエティを救った恩人達にとそれぞれ用意された部屋で、夜一と共に疲れを

癒している。一護や井上織姫、石田雨竜もそれぞれ個室を与えられているらしく、今はどうやら夜一が、いつの間にかチャドが眠っている布団の中に潜り込んでいたようだ。ちなみに、これはこれでチャドにとつて最高のご褒美だろうが、これは夜一が自ら進んで行つた行動で、ご褒美にカウントされることはない。

昨日の出来事が錯覚だったかのように穏やかな朝だ。藍染との戦いは絶対に避けて通れないと確信しているチャドと夜一にとつては、まさしく嵐の前の静けさでもある。

「む」

(し、しまったア!生理現象がアア!!)」

「お?」

何じゃ…硬くて大きいナニかが儂に当たっておるのお。んん?こんな朝早くから儂にいつたいナニをしてほしいんじゃ?」

チャドと夜一はこの騒動で強い信頼関係を結んだ。それは師弟関係のようなものでもあるが、それ以外にも……茶渡泰虎と四楓院夜一は、男と女としての関係を深めつつある。

それを考えると、チャドと夜一にとつてある意味では藍染はキューピッドのようなものなのだが、2人がそれを口にすることは決してないだろう。

「おぬしは本当に暴れん坊じゃのう。」

そこがまた魅力的なんじゃが」

「ツ——(手ツ、夜一さんの手が、息子に!!)」

今は束の間の休息期間。

「ナ、ナニをしているのですか夜一様アア!」

天井裏から碎蜂が登場するほどに穏やかで、昨日までの慌ただしさが錯覚だったかのようだ。

そもそも、護挺十三隊の隊長は暇ではないはずなのだが…。

「茶渡泰虎アアア！貴様のイチモツをここで斬り落として犬の餌にしてくれる！  
今すぐ私の目の前に差し出せエエエ!!」

決して、皆が皆このようなわけではない。決して、無能の集団なんかではない。

大切な者への想いを拗らせ、歪んでしまった結果。つまりは、これも藍染の影響なのだ。

「わ、わた、私がどれだけ…どれだけッ、初めては夜一様に捧げたいと望み続けてきたと思っているのだ!?!」

チャド曰く、101年前に頭のネジも失った碎蜂。彼女は普段こそちゃんとしているが、夜一が関わるとポンコツに成り下がってしまう。

これもまた、藍染による戦力削減なのだろうか…。

チャドは思う。これを機に、失ってしまったネジを見つけ出してほしいと…。

だが、事態はチャドの予想の斜め上を行ってしまう。  
「碎蜂、何をしておるのじゃ…邪魔をしておって。

そもそも農らは女同士。農にそっちの趣味はないぞ。

それと、チャドのを目の前に差し出せと言っておるが、生娘のおぬしに耐えられるかのおお?」

「へ?」

ひゃあああああ!？」

夜一が布団を捲ると恐ろしくらいに反り立ち存在を強調したソレがそこにあつた。それを目にした碎蜂は、生娘らしい奇声をあげてしまい、一瞬で顔は茹でダコのように真っ赤である。

「す、すすす、すぐにソレを仕舞ええええ!!」

（な、ななな、何だアレは!?!あ、あああ、あんなに大きいモノなのか!?!）」

手で目を覆い隠しているが、手の隙間からチラチラと見ている碎蜂の反応は、恥ずかしいがそれが気になってしょうがない生娘らしき反応だ。

藍染惣右介の反乱から一夜明け——この場所だけは恐ろしく平和である。

??????????

残念なことに、碎蜂のせいで夜一さんとの情事に至ることはできなかつた。

イイ雰囲気だったのだが、碎蜂のせいで全てが台無しである。しかも、碎蜂にまでアレを見られてしまうという…。生娘らしい反応は可愛らしかったが、少し恥ずかしくも

あった。

それから数日…。

「チャド様、おはようございます!!」

朝起きたら、俺の隣に褐色隠れ巨乳の美少女がいたのだが……いつたい誰だろう。護挺十三隊の死神ではなさそうだ。ただ、彼女からは懐かしい気配を感じる。いや、懐かしい気配と言うよりも、ここ最近まで身近に存在していたような…。

「あ、その顔は私が誰だかわかっていませんね！

私ですよ！崩玉です!!」

はて、彼女はいつたい何と口にしただろう。

俺はまだ夢の中にでもいるのだろうか…。

「正確には、崩玉の欠片なんですけどね！」

チャド様と離れるのが嫌で、私の一部欠片をチャド様の魂魄に転移させて融合したんです。

えへ!!」

どうやら夢の中でも、聞き間違いでもなかったらしい。俺は崩玉を強く求めるあまり、どうやら崩玉に気に入られてしまっていたようだ。しかも、俺の魂魄と融合している状況とは……俺はこれを喜んでもいいのだろうか…。

「えへへ、チャド様と一緒にいたくて、今は具象化してる状態なんですよ!!

チャド様は褐色肌と巨乳、隠れ巨乳がお好きなようなので、その要素を全て取り入れて具象してみました! どうですか?」

そして、彼女欠片は具象化して俺の目の前に現れたのだそうだ。しかも、俺の好み望みを全部取り入れた姿で現れた。

ただ一つ、俺は崩玉にそんなことを望んだことないはずなのだが、つまりは心の声が駄々漏れだったのか、心の中を覗かれてしまったのか、とにかく恥ずかしい限りである。

穴があつたら入りたい。

「あ!」

私の姿はチャド様にしか見えていないので安心してくださいね!!」

それはつまり、俺の私生活を四六時中この美少女に一方的に覗かれてしまうということ。俺にプライバシーはないのだろうか…。力を手に入れた代償は大きかったかもしれない。とは言え、やはり恩恵の方が遥かに大きいだろう。これくらいの代償で済んでいるだけマシなのかもしれない。寧ろ、好みど真ん中なので善しとしよう。

「私のことはお気になさらずに夜一さんをチャド様の女にされてくださいね! 頑張ってください!!」

何より、甲斐甲斐しいメイドを得たような気分である。

この日から、夜一さんとこの美少女崩玉の欠片に挟まれて寝る日々が始まった。何故か理由は不明だが、たまに碎蜂が潜り込んだりしてることもあるが、きつと夜一さんが目当てなのだろう。



藍染の一太刀で腰から下を斬り落とされかけた一護も全快し、俺達が破壊してしまつた瀨霊廷の復興も急ピツチで行われている。

藍染の反乱によつて尸魂界ソウル・ソサエティは震撼し、隊長が3人も離反するといふ前代未聞の事態が起きたわけだが、今回の一件で瀨霊廷に大きな傷を残してしまつたのは、藍染よりも俺達だ。

瀨霊廷の至る所で、隊長、副隊長含む護挺十三隊の隊士達と戦い、建造物を破壊しまくつてしまつたのである。おまけに、歴史的建造物でもある双匣の磔架を粉々に破壊してしまつた。恩人ということもあり、不問となつたことに正直かなり安堵している。

だから、俺に拒否権など一切ないのかもしれない。

「あの日受けたおぬしの拳が忘れられんのでのお。」

せめて、現世に戻る前にもう一度だけ戦つてほしいんじやが」

「テメエが総隊長ジジイに膝を突かせたつう一護の相棒か。くく、イイ面構えしてやがるぜ!

総隊長ジジイが破壊できなかった盾つてのも面白そうじゃねエか!!」

俺を待ち受けていたのは、すでに上半身裸のムキムキの老人と、すでに眼帯を外して全力全開で臨戦態勢の戦闘狂更木剣八という凶悪極まりない死神2人である。

前に総隊長、後ろに更木剣八。

挟み込まれて逃げ場なしである。

「おいジジイ。

このガキと殺り合うのはオレだ。ジジイは縁側で大人しくお茶でもしてやがれ」

「ならん。

茶渡泰虎と戦うのは儂じゃ。おぬしこそ少しは真面目に剣の修業をせんか。そんなんじやから黒崎一護に敗北するのじゃ」

バチバチと火花が散っていると錯覚してしまうほどに、強大な霊圧同士がぶつかり合っている。

こんな殺伐とした、世界の終わりを思わせるほどの殺気靈圧に支配された空間で立っていないだけ誉めてほしい。

『チャド様には私がついてますので大丈夫ですよ!!』

それと頼むから崩<sup>崩</sup>子<sup>玉</sup>ちゃん、今だけは俺の力を上昇させないでお願い。それをやってしまうと、事態はより混乱を極めてしまう。

「ハッ、もう二度と負けねエよ！」

それよりも、退かねエってならまずテメエから殺ってやるぜジジイ!!」

「退くのはおぬしじゃ。」

大人しく退かぬというなら仕方ない。聞き分けのない小僧には、再び剣術というものを叩き込んでやろう」

「ハハハッ、上等だ！」

最強の死神は誰か…：引導を渡してやるぜジジイ!!」

こうして始まってしまった総隊長 VS 剣八。

だが、俺としては好都合。脳筋2人は仲良く潰し合ってくればそれでいい。俺はこの隙にここから退散。

「ジジイのあとはテメエだ！」

そこで大人しく待ってやがれ!!」

俺はこの2人の執念を甘く見てしまっていたようだ。

「ハハハハハ！」

眼帯を外したオレの斬撃を防ぐか!? 斬り殺しがいのあるガキだ!!」

俺が逃げようとする、刃こぼれの激しい斬魄刀で更木剣八が斬りかかってきやがった。正直、刃こぼれの激しいこんな刀で本当に斬れるのかと思ってしまうが、その油断が最後に繋がってしまうのだろう。どんな刀だろうと、たとえ木刀だろうと、更木剣八が手にしたら鬼に金棒。

藍染の斬撃と比べても一切遜色のない斬撃だ。藍染が崩玉と完全に融合するまで戦いを避けようとしているというのも頷ける。更木剣八はこれで弱体化しているというのだから、本当に恐ろしいものだ。

「茶渡泰虎。

おぬしの相手は儂じやろうて…。

『一ツ目 撫斬』」

そしたら今度は、総隊長が全斬魄刀中最高の攻撃力を誇る焔熱系最強最古の“流刃若火”で俺を一刀両断しようとして斬りかかってきやがった。今のは本気だった。我ながら、よく反応できたと言めたいところである。

「さて、始めるとしようかのオ」

「くくく、最後まで立ってた奴が最強だ！」

こうして、いつの間にやら三つ巴の戦いへと発展してしまった。

『チャド様！

崩玉の一部欠片でしかない私は、炎を操ったり、冷気を操ったり、風や雷といった特殊能力をあなたが操れるようにして差し上げることができません。しかし、あなたの魂魄の成長に合わせて、あなたの魂魄が成長すればするほど、私は無限に霊圧と霊力、それに耐えうる肉体を与え続けます！魂の成長は無量大で、肉体ではなく本人の意志次第！

チャド様、あなたは決して歩みを止めないでください！！』

つまり、俺にこのバケモノ2人と戦えと言っているのだろうか…。とんでもない無茶振りだ。

俺の霊圧は、今まさに風前の灯である。

チャドが恐怖する……だと!?

総隊長・山本元柳齋重國が”流刃若火”を解放し、十一番隊隊長・更木剣八が己の霊力を喰らい続ける眼帯を外している。

世界は終焉を迎えようとしているのだろうか…。

「ぐう！」

く、くくく…ハハハハハ!!

さすがは一護の相棒だ！」

だが、世界の終焉を回避しようと、逃げることなく勇猛果敢に立ち向かう青年がいた。

正確には、逃げて追われるだけなので諦めて渋々、嫌々ながら仕方なく戦っているだけではあるが…。

「春水が認め、あの”瞬神”夜一が惚れ込むのも納得じゃな。ここまで、攻撃、防御の両方を極めた者を儂は見たことがない。今すぐにも護挺十三隊の新隊長として欲しいくらいじゃ」

「俺はまだ人生謳歌中の身だ。」

(それってつまり、現世で生きる俺を殺してコツチの住人にさせるってことか!?)」

勇猛果敢である反面、考えることを放棄してあるがままの現状を受け入れた青年——  
茶渡泰虎。

更木剣八を殴り飛ばし、総隊長の斬撃を盾で防ぎ、チャドはとにかく大忙し。

この2人を相手にしているというのに、この余裕さは恐れ入る。

恐らく、護挺十三隊を相手に反乱を起こした藍染惣右介との戦いを経験したことで、チャドは一度剥けたのだろう。防戦一方だったとは言え、藍染がまだ本気ではなかったとは言え、隊長や副隊長、黒崎一護ですら返り討ちにあつてしまった相手に、チャドは傷一つ負わされてはいないのだ。

四楓院夜一などの助けもあり、その助けがなければどうなっていたかは定かではないが、それでも隊長の1人を一撃で戦闘不能に追い込んだ藍染の鬼道を防ぎきつたのはチャドの強さを物語っている。

だが、チャドが今現在戦っている2人の死神は、藍染と同等の強さを誇る死神だ。もしかしたら、単純な戦闘力のみだったら藍染よりも上かもしれない。

最強の死神と最凶の死神。

そんな2人との三つ巴の戦いは、さすがのチャドも無傷ではいられないはずだ。

ラスグニョス・ニテル・サタナス  
魔王の爪痕

それでも、チャドは戦う。開き直って戦う。

「あ？」

威力が落ちてんじや：何だア、この紋様は？」

チャドは更木剣八に、これまでよりも威力の低い拳を叩き込んだ。ただ、その拳を受けた更木剣八はチャドがもう限界だと勘違いをしている。

決して、チャドは限界など迎えてはいない。確かに、更木剣八が言ったように威力はこれまでのものよりも低い。それでも吹き飛ばすほどの威力ではあるが…。

「爪痕にしては少し派手だが、アンタにはこれくらいがいいだろう」

チャドは、今の一撃に大量の霊力を込めており……すると次の瞬間、更木剣八に刻まれた悪魔の紋様がカッと光り、そして爆発した。

「ぐおオオオオオ!!」

チャドの霊力を刻み込み、爪痕を残し時間差で爆発させる必殺技。本人が口にしたように、爪痕

にしては少々どころかかなり派手だ。

チャドの渾身の一撃。この一撃を喰らい無傷なはずがない。しかし相手は、この一撃を喰らっても倒れることはない。

まさしくバケモノ。

ただ、忘れてはいけない。チャドもまた、そのバケモノの領域に足を踏み入れつつあることを…。

「はあ…はあ…はあ…効いた…ぜ…最高…じゃねエか…茶渡泰虎！もつとだ…もつとオレを楽しませろ！」

ここからはおぞましい…血みどろの闘いだ!!」

チャドの渾身の一撃で大きな傷を負いながらも斬りかかってきた更木剣八の斬撃を  
ブラソ・デレチャ・デ・ヒガシテ

”巨人の右腕”の盾で難なく防ぎ、”滅脚悪魔”を纏った左脚によるカウ

ンターを叩き込む。しかも、脚技でも”魔王の爪痕”は可能のようで、更木剣八は

蹴飛ばされて再び爆発してしまう。

いい加減、この戦いに終止符を打とう…：そう思い、チャドは全力の蹴りを放った。

しかし、これでも更木剣八は倒れることはない。

「がふッ！」

そうだ…もつとだ！お前の全力をオレに叩き込め！

オレを殺してみろ泰虎アア!!」

いつの間にか…：チャドを最高の宿敵ライバルとして認めめたのか、更木剣八はチャドを名前呼

びしている。

本番はまだまだここからだ。

その証拠に、辺り一面を炎の柱が囲う。

「儂を忘れおつて…おぬしら2人とも、灰にしてほしいのか?」

これだけ激しい戦いのなか、蚊帳の外になりつつあった総隊長が痺れを切らしたかのように、過激に動き出してしまふ。

!?

(う、嘘…だろ!?!再びのリアルデスマッチ…だと!?)

しかもこれ——自ら諸共ガチの死滅技じゃねエか!?)

### 炎熱地獄

総隊長・山本元柳斎重國が発動させたそれは、時限式の技で時間をかけて流刃若火の炎の柱を囲むように発生、増幅させ、自ら諸共周辺の一切全てを焼き尽くす禁忌の技だ。チャドが更木剣八との戦いに集中するあまり、寂しさを覚えたのか振り向いてもらう為に発動したのである。

1人だけ蚊帳の外だった寂しさに耐えられず、それで禁忌の技を発動するなど総隊長も可愛いところがある…:…そう思えるはずなどない。狂っているとしか思えない。

本来、瀨靈廷で発動していいような技ではない。

それを遠慮なく発動したのは、この場所が”中央地下大監獄 最下層 無間”むけんだからだろう。

藍染惣右介が尸魂界ソウル・ソサエティの最高司法機関”中央四十六室”を全滅させたことで、その権限が一時的に総隊長に下りたこともあり、世紀の大罪人でもない限り決して立ち入ることのないこの場所での決闘殺し合いが実現してしまったのである。

遠慮など一切無用。要するに職権濫用だ。

「更木剣八の言うとおりじゃ。」

ここからは、おぞましい血みどろの殺し合いじゃ」

山本元柳斎重國が創設した護挺十三隊。その護挺十三隊はかつて……初代護挺十三隊は、護挺とは名ばかりの殺戮集団だったそうだ。

チャドは今、その片鱗を垣間見たことだろう。



美人は怒ると怖い。

「総隊長……更木隊長……いったい何をされているのです?」

いや、この人は元から怖い。何せ、尸魂ソウル・ソサエティ界史上空前絶後の大悪人と呼ばれた大罪人なのだ。

「勇音、チャドさんの治療はあなたにお任せします。」

総隊長と更木隊長の治療は私が担当しますので気になさらずに……さあ、行きなさい」

現四番隊長・卯ノ花烈。治療部隊である四番隊の隊長ということもあり、護挺十三隊の隊長達の中でも最も穏健派に思えてしまうが、決して騙されてはいけない。

聖母の如き優しさを常に漂わせている彼女は仮初めの姿でしかないのだ。胸の前に下げている編み込んだ長髪を解放し、般若のごとく恐ろしい面妖へと変貌した彼女こそが本当の彼女だ。

天下無数にあるあらゆる流派、そしてあらゆる刃の流れは全て我が手にあり——そのような意味を込めて、彼女は自ら「八千流」と名付けたのだそうだ。

初代護挺十三隊十一番隊長にして、「初代剣八」卯ノ花八千流。

卯ノ花隊長の冷えきった瞳を見た瞬間、『このクソ忙しい時に何しとんじゃボケエ』……俺はそんな幻聴を聞いた気がする。

「は、はいはいはい」

それに見てみる……虎徹勇音さんなんてすっかり怯えきつて萎縮しまくっている。こんな場所にやって来るのも大変だっただろう。そもそも一緒に連れてくる必要もな

かったはずだ。

「チャ、チャドさん！す、すぐに行きましょう！」

歩けますか？歩けなかつたら抱っこしますの！と、とにかく早く行きましよう！」

俺の為だったか…。

雰囲気は殺伐としているが、慌てふためく勇音さんに何だかほっこりさせられた。ただ、いくら彼女の身長が女性にしては高いからとは言え、抱っこされるのは男として…。彼女なら普通に出来てしまうのだろうか、それだけは遠慮願いたい。いや、もしかしたら彼女の隠れ巨乳を堪能できるのではないだろうか…。

そんな邪な考えを抱きながら、俺は勇音さんに連れられて中央地下大監獄“無間”からようやく脱出した。

卯ノ花隊長達が地上に戻ってきたのはそれから数時間後のことである。

総隊長、現・剣八、初代剣八の三つ巴の戦いなど、何と恐ろしいことか…。

それにしても、我ながらよく生き残れたと思う。初代護挺十三隊は、護挺とは名ばかりの殺戮集団だったと…まさきはその通りだったのだろうと痛感させられた。

?????????

総隊長・山本元柳齋重國と十一番隊隊長・更木剣八から解放された俺は、現在四番隊隊舎にて四番隊副隊長・虎徹勇音さんの治療を受けているところだ。

崩<sup>崩玉の欠片</sup>子ちゃんのおかげもあって、傷の治りはとんでもなく早くなっており、俺が望めばすんなり完治するのだろうが、今回は大人しく勇音さんの治療を受けることにした。

勇音<sup>隠れ巨乳</sup>さんとゆつくり話ができるイイ機会だ。この機会を逃したくはない。まずとりあえず、双<sup>双</sup>の丘で手刀で優しくしたとは言え、気絶させてしまったことを謝罪した。

「あ、頭を上げてください！チャドさんが謝られることなんて何一つないですよ！」

それに、チャドさんは私に怪我をさせることなく、手加減までしてくれてたんですよ？」

他にいた男<sup>副隊長達</sup>2人は多少手荒くなってしまったが、勇音さんだけは丁寧に、優しく、壊れ物でも扱うかのように扱わせてもらった。当然である。いったい何故、どうして俺が彼女を傷つけないといけないのか…。

「寧ろ私からお礼を言いたいです。」

チャドさんが…チャドさん達がいなければいっただうなっていたことか…。

あなた達は尸<sup>ソウル・ソサエティ</sup>魂界の大恩人です。本当にありがとうございます」

俺はその感謝を純粋に受け取ることなどできない。自分の目的を果たす為に暴れていただけ……それを考えると申し訳なきで一杯だ。

そして、勇音さん。なんてイイ娘なんだ。

『チャド様！口説き落とす攻め落とすなら今ですよ！大チャンスです！ワンチャンありますよきつと！！』

俺の心の中から崩子ちゃんのそんな声が聴こえてしまう。まるで悪魔の囁きのようだ。それよりも、崩子ちゃん……ワンチャンなんて言葉どこで覚えた。いや、間違いなく俺の影響だろう。

ただ、ここは男らしい対応を見せておくとしよう。

俺は俺の目的を果たしたに過ぎないのだと……。その結果、たまたまそうなっただけな

のだと……。大恩人などと思う必要はないと……。

「チャドさんは強くて、肉体が逞しいだけでなく、心も逞しい優しいお方なんですわね。素敵です」

まさかの返しに俺は戦慄した。虎徹勇音は実は、とんでもない魔性の女だったのか……。

治療の為に、俺は上半身裸の状態なのだが、触れる手が何だかアレだったのはそういうことだったのか……。

「あ…わ、私…な、何を言つて——ッ、い、今のは忘れてください!!う、嘘ではないですけど忘れてください!お、お願いします!!」

ド天然……だと…。

ド天然長身隠れ巨乳なんて……しかも、男性経験が少ない”おぼこ”っぽいこの様子。勇音さんは夜一さんに引けをとらない属性を有しているようだ。ちなみに、夜一さんはご存知の通り気紛れ褐色巨乳だ。

「と、とりあえず治療の続きしますね!!」

そう言いつつ、顔を真っ赤に染めた状態で恥じらいながら治療する勇音さんは、俺の男心を強く擦った。

するとどうだ——お約束的な展開が訪れてくれた。

「総隊長に決闘を申し込まれ、それを受け…四番隊隊舎に運ばれたと聞き、心配してやって来たのじゃが……可愛い女子おなじと随分と楽しそうじゃのお、チャド」

どうやら、俺の男心はまだまだ擦られるようだ。気紛れだが、ヤキモチ妬きな夜一さんは実に可愛らしい。

もしかしたら、これは夢なのか…。そうか——実は俺、総隊長と更木剣八との闘いで死んだのか…。

『チャド様は生きてますよ!』

元氣一杯です!!  
』  
俺は己の頑丈さに恐怖した。

## チャド専用……だと!?

黒崎一護、茶渡泰虎御一行が現世へと帰る日。

チャドはこのまま自分が現世に帰っていいのだろうかと思案していた。

今のチャドは、魂魄と崩子崩玉の欠片ちやんが完全融合してしまっており、あまりにも異質な状態だ。普通の人間ではない。

そもそも、チャドの周りには普通ではない人間が多く存在しているが……。死神の力を持つ黒崎一護。”事象の拒絶”と言う神の領域をも侵す力を手にしてしまった井上織姫。”滅却師クインシー”の生き残りである石田雨竜。チャド自身を含み4人も存在している。

ただ、今のチャドは異質だ。本人は知らないが、実は死神の力以外も有している黒崎一護同様に異質なのだ。

チャドの力を目覚めさせ、井上織姫にも特異すぎる力を与えた崩玉の欠片と完全融合してしまったことで、欠片とはいえ周囲に与える影響は計り知れない。

また新たに、チャドや井上織姫のような特異な力を開花させる人間が現れる可能性もある。チャドはその点を強く心配しているのだ。

『そこはご心配なく！』

何故なら、私はチャド様専用の崩玉のようなもので！チャド様以外に影響を与えることはまったくございませぬよ！』

しかし、チャドの心配は杞憂に終わったようだ。

それにしても、チャド専用の崩玉欠片とは恐れ入る。しかも心意次第で、チャドの力は無限に成長するのだから、これはVIP待遇ではないだろうか…。

「俺の霊圧は無限に成長することだが、魂魄の弱い者に与える影響は大きいんじゃないか？」

近づいただけで死んだり…弾撃けたりし散ちやわないか？大丈夫か？」

『通常時と戦闘時で上手く切り替えればいいだけのことです。チャド様は、普段はあくまで人間なのですから。』

ですが、戦闘になれば——超越者になるのです！』

どうやら、周囲への影響は本当にまったく気にするようなことではないのかもしれない。い。

だが、それと同時にチャドは思った。

別に超越者になりたいわけではないのだと…。霊圧が消えたくないだけで、そこまでは求めていなかったのだと…。

周囲に与える影響もそうだが、チャドは今の自分の現状……何よりも今後の己の状況について心配しているのである。

今のチャドの現状は、霊圧が消えないで最後まで戦いに参加するという当初の目的を果たすことはできたが、イレギュラーが発生してしまっており、より強い相手が障壁として常に立ち塞がる現状となっている。

強者が強者を引き寄せる。因果応報のようなものだ。

つい先日総隊長・山本元柳斎重國も、最強の死神史木劍八と最凶の死神の2人と激闘を繰り広げたばかりだ。その闘いでも生き残り、チャドはまた一皮剥けてしまった。

今後災厄も同じような展開が降りかかるが必ず起きるだろう。

チャドの苦難は今後も続き、成長する度に更なる強敵が立ち塞がることになる。

そして残念なことに、チャドにはもう逃げ道がない。崩子ちゃんが外堀を埋めてしまったのである。代償なく願いを叶え続けてくれることなどない。只より高いものはないのだ。

チャドはそれを痛感し、まったく別の生き物になってしまったような感覚を抱きながら現世へと帰ることとなる。



青天の霹靂。

「チャ、チャドさん。」

あ、あの…これは現世に駐在している死神が尸魂界ソウル・ソサエティからの虚襲来の指令を受け取る“伝令神機”と言う通信機器を改良してもらったもので、現世の携帯電話とほぼ同じようなものです。機能は通話とメールのやり取りのみしかできませんが…も、もし、チャドさんが嫌でなければ…現世に戻られてからも、私と連絡を取り合ってくださいませんか？」

「ほオ…モテモテじゃのオ、チャド」

後に修羅場。

帰る直前、俺は勇音さんから通信機器をプレゼントされようとしている。しかもどうやら、俺と勇音さんが連絡を取り合う為のみに改良してもらった物であり…即ち、俺と勇音さん専用だ。

ただ、帰る直前に…よりにもよって夜一さんの目の前で渡さなくてもいいだろう。勇音さんが意外と度胸があることをこのタイミングで知ることになってしまった。

あと夜一さん、腕をつねらないでほしい。痛い。

「チャドさん、受け取って差し上げてください。」

勇音が特定の殿方にこのような思いきった行動をするのは初めてのことなのです」  
 そしてまさかの、卯ノ花隊長からの援護射撃。卯ノ花隊長は『私の可愛い愛弟子を誑かしてんじゃねエ殺すぞ』的な反応を見せるのではないかと思っていたのだが…。

「勇音と仲良くしてあげてくださいいなね」

笑顔が怖い。

『勇音に手エ出したら、すぐに死んで護挺十三隊に入隊しねエと赦さねエ』——そんな幻聴まで聴こえてしまった。

「卯ノ花隊長、チャドはこれからますます強く、逞しく、素晴らしい男になるじやろう。間違いないな。」

言っておくが、副隊長如きでは釣り合わんぞ?」

しかし、事態は混迷を極めている。とても嬉しいことではあるのだが、夜一さんがヤキモチを妬いてしまっており、卯ノ花隊長に真正面から勝負を挑み始めてしまった。

白打最強と初代剣八の女の闘いなど恐ろしいにも程がある。

「夜一さん…言っておきますが、勇音は私の後継者です。副隊長如きではありませんよ。勇音の回道を直接受けたチャドさんなら、勇音の素晴らしさがわかりますよね?…ね?」

ここで俺に話を振らないで頂きたい。

「ぐ…じゃ、じゃがそれがどうしたと言うのじゃ。

白打最強の私こそが隣にいるのに相応しい。チャドをもっと鍛えてやれるのは儂のみじゃ。

その娘に儂と同じことはできんじやろう」

「ぐ…そう来ましたか夜一さん。

確かに、勇音に白打の才能はありません」

俺からしたら、夜一さんも勇音さんも魅力的すぎて、順位などつけられるはずもない。

『チャド様、素敵です！』

その懐の深さ、感服します!!』

崩子ちゃん、お願いだからやめてくれ。惨めになるだけだ。今の俺は夜一さんと勇音さんに順位などつけられるはずがなく、2人に一途…つまりは、典型的な駄目で優柔不断な男。

誉められても逆に虚しくなるだけである。

「ですが、決めるのはチャドさんです」

「確かに…そうじゃな。

チャド、儂と小娘…どっちがいい？」

これは、そんな優柔不断な俺への罰なのだろうか…。

双匣の丘の“穿界門”前にて、見送りにやつて来た死神達の視線が俺に向いている。

答え次第で、俺の霊圧命は終わるは消える。事の成り行きを黙って見ていた碎蜂はこれ幸いと、

蜂の下腹部を横したような照準器付きの砲台に、金色の蜂の針状の砲弾が装備された物騒半解・毒蜂雷光鞭なモノを構えている。

卯ノ花隊長は、『もちろん勇音を選びますよね?』と、そんな笑顔を俺に向けているが、斬魄刀の柄に手が伸びている。

チラツと一護や井上、石田に視線を向けたら、見事に顔を逸らされてしまった。俺達友達だよね…。

誰も俺を助けてはくれないようだ。

「泰虎ア、まだ帰るんじゃねエ!

テメエの盾を今度こそ斬る!!」

だが、天は俺を決して見放しては……いや、これはそう言えるのか些か疑問だ。何故なら、双匣の丘に現れたその男は、これまで常に肌身放さず持ち歩いていた斬魄刀——柄や鞘にサラシを巻いた刀身がボロボロに刃こぼれしまくった長刀ではなく、チャドよりも僅かに大きい自身の体軀に匹敵する大斧を肩に担いで臨戦態勢状態だからだ。

その場にいる誰もが驚いている。卯ノ花隊長も、すっかりそちらに意識を持つていかれており、俺は助かったと言えば助かったようなものだ。夜一さんには、あとで追及さ

れてしまいうだろうが…。

ともかく、皆の関心は俺から逸れてくれた。今は、護挺十三隊の隊長の中で唯一”卍解”を習得していなかった更木剣八が、ついに卍解を習得したのかと…：…そちらに向いている。

ただ、それが卍解ではないことを知るのは俺だけだ。

「泰虎…：テメエともつと殺し合う為に得た力だ。始解・野晒 帰る前にとくと味わって逝きやがれ」

しかし、本来なら剣八が始解を習得するのはもつと先だ。崩子ちゃんは俺以外に影響を与えることはないと言っていたが、それは果たして本当なのだろうか…。

『私が影響を与えることがないのは事実です。』

けど、チャドさんに影響されて、切磋琢磨してライバルが強くなる…これは普通のことですよね?』

崩子ちゃんの影響などではない。俺との闘いで、剣八が昔に戻りつつあるだけ。その反面——俺の霊圧が、常に危うい状態になっている。

?????????

短かったような長かったような。

朽木ルキアを助ける為に足を踏み入れた尸魂界……滞在した期間はだいたい2週間ほどだが、とにかく内容が濃い為に数ヶ月滞在したような感覚だ。

とにかく闘いに明け暮れていた。

考えてみたら、護挺十三隊の隊長5人と戦っている。我ながらよく死ななかつたと思う。

茶渡泰虎にとつての鬼門だった京楽春水戦から始まり、中断したとは言えイレギュラーな朽木白哉戦、総隊長・山本元柳斎重國と2度のリアルデスマッチに、そこに更木剣八を交え、そして藍染惣右介との防戦一方な闘い。

最初は、京楽さんとの闘いを霊圧が消えることなく乗り切り、朽木ルキア救出のその時まで、この闘いに加われるようにと……それだけのつもりだった。

それがどうだ。黒崎一護主人よりも物語の根幹に深く関わってしまった。  
崩子崩玉の欠片ちゃんの欠片と完全融合してしまっているのが、何よりもの証拠だ。

良いことも悪いことも、想定外のこと、とにかくたくさん経験した。

だが今は、無事に帰ってこれたことを喜ぼう。

「お疲れ様じゃな……チャド。」

おぬしは本当によく頑張ってくれた」

俺は現世に帰って来た。

ただ、勇音さんからのプレ<sup>通信</sup>ゼント<sup>機器</sup>を受け取り、始解を習得して襲いかかってきた剣八からどうにか逃れて穿界門を通過して現世に到着し、今回の騒動の原因でもある浦原喜助さんの出迎えを受け、独り暮らしする部屋に帰って来てみたら何故か……夜一さんをお持ち帰り状態である。

「おぬしは今回の一件で、間違いなく藍染に目をつけられておる。じゃから、儂がおぬしのそばにいることにした。あと……少し目を離したただけで、おぬしは他の女子<sup>おなじ</sup>を虜にしようようじゃからのオ」

色々大変だった。けど、良いことの方が多かったかもしれない。

夜一さんが俺専属の護衛として、夜一さんとの共同生活が始まるのである。

「それよりも腹が減ったのオ。

チャド、飯にしよう」

夜一さんとの共同生活で、俺はいつたいたいどうなってしまうのだろうか……。

「あ、そうじゃ。

おぬしには儂の素晴らしさを魂の真髄まで叩き込んでやるから覚悟しておくことじゃ」

褐色気紛れ巨乳な夜一さんと一つ屋根の下。何も起きないはずがない。寧ろ、ついにその時がやって来たのかもかもしれない。

まだ夏休み期間。今年の夏は情熱的で過激的になりそうだ。

もつとも、やるべきことは多い。楽しんでばかりはいられない。茶渡泰虎が乗り越えるべき試練がまた迫っているのだから…。



サシオン・デル・サタナス  
魔王の制裁

「こ、このツ、クソガキがアアア!!」

夏休みが終わりを告げ、新学期が始まり数日後……やはり事態は急変した。

遂に、護挺十三隊を離反した藍染惣右介が本格的に動き出したのである。それも、護挺十三隊側の想定よりも遥かに早く。

強大な力を持った敵の現世への襲来。

茶渡泰虎にとつての鬼門その2——右腕もがれ事件。

ただ、チャドはそれを乗り越えるべく、真つ向から立ち向かい”

ブラッ・イスキエルダ・デル・デイアプロ  
悪魔の左腕

” から放たれた手刀で、敵の右腕を斬り落としていた。

戸魂ソウルンサエテ界から戻ったチャドは、夏休みの残りの期間を四楓院夜一と修業に当て、また一段と成長していたのである。

全ては、この日を乗り越える為に。

チャドが再び、闘いに身を投じる。

## チャドと破面（アランカル）篇

チャドが再び嫉妬される……だと!?

夏休みも終わり、再び学校生活が始まって間もなくのことだ……空座町に強大な力を持つ敵が襲来した。

そして、その襲来した敵に誰よりも早く立ち向かう男が1人——茶渡泰虎である。

「ほう……」

角が生えた仮面の名残を左頭部に被り、喉元に孔が開いた瘦身で真っ白な肌をした黒髪の男——雄の“破面”アランカルが、視線の先で繰り広げられる激闘を静観している。

正確には、表情はまったく微動だにしていなが、仲間が追い込まれている現状に驚きはしているようだ。

「ヤミーの腕を手刀で斬り落とすとは……成る程、藍染様が警戒されるだけのことはある。  
（このガキが黒崎一護ソウルソサエティよりも厄介茶渡泰虎な存在か……）」

死後の世界”尸魂界”で起きた藍染惣右介の反乱から数週間。

朽木ルキアを救出し、無事に現世に戻ってきた茶渡泰虎は残りの夏休みを有意義に

……平穩な日常を送っていた。

しかし、その日常は突然終わりを告げてしまった。もちろん、チャドはこのような事態になることを最初から知っていた。

その為の準備も抜かりなく、四楓院夜一直々に鍛えてもらい、チャドは数週間でもた一段と強く逞しくなっている。

「……んのツ……クソガキがアアア！」

『虚閃』!!」

そのチャドは今、自身よりも大きい色黒の破面と戦っている。

そもそも、破面とは何なのか……簡単に説明すると、虚ホロウの上位種だ。虚の仮面を外すことで、死神の力を手に入れんとする虚である。

そして、護挺十三隊に対抗する為の藍染惣右介の兵力でもある。

当然、藍染の兵力ならば弱いはずがない。

腕を斬り落とされた破面——ヤミー・リヤルゴは、腕を斬り落とされた借りを返そうと至近距離からチャド目掛けて虚閃を放つ。これだけ至近距離から、虚の上位種である破面の虚閃を受けてしまったら、チャドも無事では済まないだろう。おまけに、ヤミー・リヤルゴは崩玉の影響を受けているはずだ。

藍染が大虚メクスと手を組んでいることは、すでに周知の事実。藍染が崩玉の力を用い、大

虚の強化を行うのは当然で想定内だ。

だが、ここまで早く行動を開始することだけは想定外だっただろう。

しかも、今までは不完全だった破面が崩玉の力によって一気に進化しており、その身から放たれる霊圧は護挺十三隊の隊長格と比べてもまったく引けをとらないほどのものだ。崩玉の与える影響が如何に大きいのかを物語っている。

「何……だと……!?!」

ただ、ヤミー・リヤルゴが放った虚閃は、チャドに傷一つ与えることなく、チャドの

”巨人の右腕”に吸い込まれたかのように消失してしまう。

「大した虚閃だ。

それから……ご馳走さま。これはお返しだ」

ベンガンサン・デ・サタナス  
魔王の復讐

確かに、崩玉の与える影響はとてつもなく大きい。

しかし、崩玉の影響を受けたのは破面達だけではない。寧ろ、誰よりも崩玉の影響を受け、これから先も未来永劫ずっと受け続ける者——それが、茶渡泰虎だ。

ヤミー・リヤルゴの虚閃を吸収したチャドはその力を己の力へと変換することで、”

ブラッ・イスキエルダ・デル・デアプロ

悪魔の左腕”から繰り出される攻撃の威力を倍増させて叩き込む。  
 「ぐっ!!」

その威力はチャドよりも巨大なヤミー・リヤルゴに血を吐き出させ、膝を突かせるほどのものだ。

そして、チャドは間髪入れずにヤミー・リヤルゴを蹴り飛ばす。

「ぐはッ!!」

デアプロ・デストルクシオン

”滅脚悪魔”から繰り出される蹴りは、ヤミー・リヤルゴを軽々と吹き飛ばした。

それから、チャドは悠然とした態度でもう1体の破面へと視線を向けて口を開く。

「お前は見てるだけか？」

ただ、チャドがそう口にした瞬間、その破面はチャドの眼前へと迫っており、腰に差していた斬魄刀らしき刀を抜いて斬りかかってきた。

衝突する盾と刀。その瞬間、とてつもない衝撃波が辺り一帯に駆け巡る。

「解放状態ではないとはいえ、ヤミーをここまで圧倒するとはな」

「解放……つまり、その刀はただの刀ではなく斬魄刀ということか……」

「お前達は死神の力を持った虚なのか？」

「なかなか賢いガキだ」

ヤミー・リヤルゴよりも遥かに小柄で、限りなく人間に近い体格のもう1体の破面は、無表情ながらも強者の雰囲気溢れ出ている。ヤミー・リヤルゴと比べても、圧倒的な霊圧だ。

しかも、死神の斬魄刀戦術と同じように、破面の斬魄刀にも解放があるのだそう。それが死神のそれとまったく同じなのか……それは定かではないが…。

「ならば、解放される前に倒すとしよう」

もちろん、チャドは知らないフリをしつつ、全てを知っている。それ故に、解放する暇を与えまいと左腕で殴りかかる。

「大した一撃だ」

その一撃を斬魄刀で防ぎつつ、破面は威力の高さに感心していた。

今のチャドは、常時”魔人ラ・ムエルの一撃テ”を放てるまでに成長しており、並の相手では手も足も出ず、一撃で終わりだろう。”尸魂界ソウル・ソサエティ”から帰還後、四楓院夜一との修業でそこまでの成長を遂げているのである。

「どうやら、さっきのデカブツよりも強いみたいだな」

「さてな。」

それよりも名乗っていないかったな。オレはウルキオラ…ウルキオラ・シファード」

だが、この状況はその影響であり、その弊害なのだろう。一難去つてまた一難……い

や、茶渡泰虎の鬼門が圧倒的に進化<sup>変</sup>して、襲いかかってきたようだ。

??????????

おかしい。

何かがおかしい。

変だ。

俺は主人公ではない。俺は茶渡泰虎だ。これは解りきっていることで、疑いのような  
いことで、決して変えることのできない事実で、俺にとっては悲劇のようなものだ。

茶渡泰虎に転生するという悲劇。  
霊圧が消える男

もちろん、今はもう絶望などしていない。霊圧が消える男からも脱却しつつある。そ  
れに、茶渡泰虎に転生して良かったとすら思っている。

だが、おかしいものはおかしい。

「この速さにも対応するか…」

俺は何故……どうして俺がウルキオラ・シファーと戦っているのだろう。

「貴様はオレ達にとつて脅威だ。」

故に、今ここで貴様を排除するとしよう」

ウルキオラ・シフアーは主人公が戦うべき敵で、俺が戦っていい相手ではない。「黒崎」護  
中ボス

なのにどうして、俺はウルキオラと戦っているのだろう。

そもそも何故、誰も駆けつけてくれないのか……。いや、今ここに夜一さん、浦原さん、それに一護が向かってきているのは感知できている。もう少しでここに到着するはずだ。

ウルキオラ達が俺の知識通りに現世に襲来し、過程は多少違いがあるものの、もっとも近くにいた俺が最初に遭遇し、その結果闘うことになるのは致し方ない。しかしそれでも、どうしてこのような事態になっているのか不思議で仕方ない。

ただ、茶渡泰虎にとつての鬼門の1体、ヤミー・リヤルゴをどうにか返り討ちにしたから仕方がないのかもしれないが……。だからといって、新たな障壁がさつそく立ち塞がることはないだろう。しかも、その障壁は破面アランカルで最も強いと噂されていたりもしたウルキオラ・シフアーだ。

鎖せ・黒翼大魔  
ムルシエラゴ

ソウルンサエテ  
戸魂界で繰り広げられた激闘から数週間。現世に帰還した俺は、平穏な毎日を過ごしていたはずだ。正確には、次の闘いに備えての準備期間であり、夜一さんと毎日修行し、毎日一緒にお風呂に入り、毎日一緒に寝て、起きて、愛を育み……そんな充実した残りの夏休みを過ごしていた。悲しいことに、最後までは行けていないが……。

それがまさか、夏休みが終わって2日目にして、このような事態に陥ろうとは……。しかも、ウルキオラは一段階目の解放状態になってしまっている。明らかにおかしい。コイツが解放してしまったら、周囲へ与える影響は甚大のはずなのに。

「藍染様から許可は下りていたが、本当に……護挺十三隊の隊長達以外に斬魄刀を解放することになるうとは思ってもいなかった。大したガキだ」

新学期が始まる前から、俺は今日この日をどのように乗り越えるか思索していた。

俺が知っている通り、新たな介入者の出現もあつて始まった新学期。ただ、俺は本当に記憶通りに過ごしても良いものだろうかと悩んでいた。すでに、これまでの過程が大きく変わっているのだから当然だろう。

一護は記憶原作にある黒崎一護よりも強くなっている。それに何より、俺自身もだ。

「チャドくん!?!」

「井上……お前はここから離れろ。」

お前を護りながら闘うのはさすがに無理そうだ。それに、夜一さん達がここに向かっ

てるから、到着するまでの時間稼ぎくらいはできるから心配するな」

井上織姫もこの場所にいる。これに関しては記憶通りで、変わることはなく、一緒に行動していた理由も同じだ。正直なところ、放置していても問題ないのだが、一護の身の回りで起きる変化に井上織姫は敏感なのだから仕方ないだろう。一護に接触してきた新たな介入者の存在が、井上を突き動かしている。

その介入者に接触を試みた井上と、その場に同行した俺……その後、何だかんだあつてからウルキオラ・シファーとヤミー・リヤルゴが現世に襲来し、今に至るというわけだ。

だいぶ省いてしまったが、夏休みは何事もなく終わって新学期が始まり、新学期が始まったからさっそく問題発生というわけである。その問題が記憶とはまったく違ったもので、俺は辟易しているところだ。もともと、その原因は俺自身のせいだが……。己自ら腕をもがれるのを望むはずがない。だからヤミー・リヤルゴ相手に頑張ったのである。

その結果がこれだ。解放前の状態ですら最強感漂うウルキオラが襲いかかってきて、俺は自分の行動に後悔している。ただ、腕をもがれるのが嫌だったのは本当だ。

俺はいつたいどうすれば正しかったのだろうか……。

『チャド様！』

今こそ夜一さんとの修行の成果を見せる時ですよ!!』

そんな悩む俺とは違い、崩子ちゃんはやる気に満ち溢れている。  
 「ほオ、翼まで…オレと大差ない姿になったな」

ならば、俺は崩子ちゃんの期待に応える他あるまい。

ウルキオラが人差し指を俺に翳し、”黒虚閃”セロオスキョウスをいきなり放つてこようとも、俺はそれに対応しなくてはならない。一護ですら手も足も出なかつたウルキオラが相手だろうと、俺は勝たなければならぬ。

ウルキオラは本気で、俺を排除しようとしているのだ。霊圧を消そう

しかしそれにしても、翼を生やした今の状態は確かに似ているかもしれない。俺の”悪魔の飛翔”はウルキオラとは違い片翼ではあるが…。

茶渡泰虎の能力は虚に似ているのを改めて痛感した。

虚閃もやろうと思えば可能だろう。

エクスプロシオン・デル・サタナス  
 魔王の爆発

俺のは、着弾すると大爆発を起こす球状の霊力の光弾。

「！」

（黒虚閃と張り合うか…）」

光と闇の衝突は凄まじく——とりあえず誰でもいいから早く救援を求めろ。



私は護られてばかり。

今もチャドくんにも護られて、私は邪魔にならないように離れているだけ。見ていることすらできない。

朽木さんを助ける為に行った戸<sup>ソウル・ソサエティ</sup>魂界でもそうだった。私だけがまったたく役に立てなくて、茶渡くんは最後まで戦い抜いて、黒崎くんも背中を任せられていた。

中学校の頃から、茶渡くんと黒崎くんの間には、私が入り込めない信頼関係が築き上げられて、私はそれがずっと羨ましくて……今は嫉妬すら覚えてしまう。本当に嫌な子だと思ってしまう。けど、茶渡くんの強さが羨ましくて仕方ない。

「い、井上ツ……と……たつき!？」

「く、黒崎……くん」

「大丈夫か!？」

私が大好きな黒崎くんが唯一、背中を任せられる茶渡くんが羨ましい。

「オレはこれからチャドのもとに向かう。井上は何があっても絶対に……危ねエから近づ

かないでくれ。

井上はたつきを頼む!!」

私では到底……天地が引っくり返ったとしても勝てるはずのない敵。

でも、チャドくんはその敵と闘って、黒崎くんはチャドくんの助けに向かう。チャドくんと黒崎くんは、お互いの背中を護り合って闘うんだ。

私は、それがとにかく羨ましい。

チャドくん——私は、あなたを憎んでいると勘違いしてしまいそうなくらい、あなたに嫉妬してる。

強大な霊圧同士の衝突。その衝突で起きた大爆発。それはまるで、今の私の荒ぶる心境を表しているみたいに思えた。

「チャドの霊圧がついに……だと!？」

その闘いはまるで、悪魔同士が闘っているかのようだ。

「ぐあッ!？」

「こ、これがッ、レベルアップした”虚化”一護ですら手も足も出なかつた黒翼大魔

……ッパネエ!!」

「ぐッ!!」

「この男……本当に人間か?」

激しい空中戦の末に、茶渡泰虎とウルキオラ・シファアは互いに地面に激突する。

拮抗した勝負……一見、無傷のウルキオラが圧しているように見える。

パワーはチャド。スピードはウルキオラ。防御力はチャド。霊圧は同等。総合力ではチャドが僅かばかり上に思えるかもしれない激闘ではあるが、どんな傷も……手足を斬り落とされようとも瞬時に再生するウルキオラの再生能力の高さが脅威となり、実際は人間であるチャドが追い込まれている状況だ。

チャドの手刀で斬り落とされてしまった腕も、チャドの槍で貫かれた傷も”超速再生

”能力によって完治し、ウルキオラは無傷の状態だ。

対してチャドは、四肢の欠損など致命的な傷こそ負ってはいないが、体の至る箇所にも傷を負っており、かなり血を流してしまっている。

「はあ、はあ、はあ……ぐッ……！」

（やつぱウルキオラがNo.4とか嘘だろー！）

チャド自身も、ウルキオラの強さをその身で嫌というほどに味わっており、内心で悪態を吐いている。

だが、実際は違う。

「……。」

（奴の拳が内側に強く響いて内臓に強いダメージを負っているな。四肢を斬り落とされるのはまったく問題ないが、このまま奴の拳を受け続けてしまったら何れ内臓が破壊されかねん）

チャドの拳は確実にウルキオラを追い込んでおり、どうやら互角の闘いを繰り広げているようだ。

ただ、破面の皮膚——”鋼皮”は本来、チャドが思っている以上に硬いものだ。並の死神では傷一つ負わずことができず、指一本で斬魄刀を防がれてしまうほどに硬い。もちろん、その硬さは靈力の高さに比例するようで、護挺十三隊の隊長、副隊長となれば、

傷一つ負わせられないということはないだろう。

もつとも、ウルキオラ・シファーが相手となると話は別だ。まず、副隊長達では腕を斬り落とすどころか、掠り傷一つ負わすこともできないはずだ。

それほどまでにウルキオラは強い。

しかしそれはつまり、チャドがそれだけ強くなっているということでもある。

そもそも、チャドは手刀で破面の腕を斬り落とせるほどまでに成長しているのだ。これも、夜一との修業の成果であり、強くなることに意外と貪欲なチャドの願望と努力に崩玉の欠片が応えたからでもある。

チャドの霊圧は、どうやら本人が思っている以上に高次元に至りつつある。戸魂界

での激闘の日々……それだけではなく、総隊長・山本元柳斎重國と十一番隊長・更木剣八との予期せぬ闘いが、その扉を抉じ開けてしまっていたのだろう。

数多の死線を潜り抜けることで強くなる……これは、死神、破面、人間と、どんな種族にも限らず共通していることだ。寧ろ、人間と死神に関しては、成長するにつれて雑念などが混じることで薄れてしまう野生——生に対する本能を取り戻したとも言えるべきだろうか……。

「俺は……負けない」

今のチャドは、霊圧が消えないこと生きることに対してどこまでも我夢者羅で死に物狂いだ。絶対に死ぬ

まいと、鬼気迫る様子だ。

「…ッ！」

（ここにきてまた霊圧が増している…だと？）

仕方ない。万一の場合、現世で使うのを一回だけ許されている。まさか本当に使うことになるとは思っていなかったが…。大したガキだ…茶渡泰虎」

そんなチャドの鬼気迫る様子に危機感を覚えたウルキオラは、禁忌の技をチャドに放つ。

「冥土の土産に有り難く受け取るといい。

『グラン・レイ・ゼロ 王虚の閃光』

自身の血を霊圧に混ぜることで放つことのできる最強の虚閃<sup>セロ</sup>。その威力、範囲は通常の虚閃や黒虚閃<sup>セロ、オス・キヨラス</sup>とは比べ物にならないほど大きく、空間すらも歪めてしまうほどのものだ。

「うおおおおお!!」

（ウルキオラが強いのは最初から知ってた！

けど、俺は負けん！俺の霊圧は絶対に…消えない!!）」

「！

（何…だと？）

腕だけではなく、胴体まで変化しただと？アレは何だ？アレは……まるで鎧だ！」

チャドはウルキオラが放った最強の虚閃を前に一步も引くことなく、真つ向から立ち向かう。そんなチャドに呼応するかののように、新たに進化する能力。両腕から胴体に向けて、胴体を護るように鎧が覆う。

右半分と左半分は、それぞれ腕と同様に模様が違っている。だが、その鎧はチャドの霊圧がまた一つ……更なる高みへと登った証明だ。

”魔王の鎧”。防御の右腕、攻撃の左腕、破壊の両脚。そして今度は、チャドが魔王への道を着々と上り詰めているかののように、胴体が禍々しい鎧に覆われた。

「俺の霊圧は……消えない!!」

チャドが人間を越えた存在へ——本物の悪魔<sup>魔王</sup>へと進化した瞬間だ。”  
ブラソ・イスキエルダ・デル・ディアブロ  
 悪魔の左腕”に霊力を集中させ、指を開いて構えるチャドはまるで、獲物を狩るかのよう……その禍々しきは破面とはまた違う。

ガラ・デル・サタナス  
 魔王の鉤爪

魔王が王虚を斬り裂いた。

それは如何なるものも斬り裂く——自ら運命を切り開き、如何なる困難も乗り越えて

きたチャドの強さを体現していた。

「何…だと…」

ウルキオラも、解放状態で放った最強の虚閃を斬り裂かれるとは思ってもいなかったらしく、表情こそ微動だにしてないが、実際はかなり驚いているようだ。

「くっ…」

（やべエ…限界っぽい）

ただ、さすがのチャドも限界を迎えてしまう。血を流しすぎたのだ。傷の治りが常人よりも遥かに早いとはいえ、ウルキオラのように瞬時に再生できるわけではない。いくらチャドの力が虚、破面に似ていようと、チャドが人間であることは否定しようのない、疑いようのない事実だ。常人よりも遥かにタフで、崩玉の欠片と魂魄が融合したことで超人になりつつあるが、それでもまだ人間だ。

「チャド!!」

「夜…一…:さん。」

（ホント…いいタイミングで来てくれるよな。）

王子様みたいだ…」

薄れゆく意識のなか、チャドの瞳が捉えたのは愛しい女の姿で…:チャドはそのまま、安心して意識を手放した。

?????????

目が覚めると、見慣れない天井だった。

そして隣には、俺のよく知っている褐色巨乳美女が眠っている。俺の右腕にしがみつくように眠っている彼女からは、いつもの気紛れな様子がまったく感じられず、美しさよりも可愛さが際立っているように思えてしまう。

『ようやく目が覚めましたか。』

チャド様はウルキオラ・シファアとの闘いから3日も眠られていたのですよ』  
それと左腕には、崩子ちゃんだ。

『チャド様、ウルキオラ・シファアとの闘いではさすがでした。血を流しすぎて気絶してしまわれましたが、夜一さんとの修行での成果はしっかりと出ていましたよ』

そうだった。

俺は、”レスレクシオン刀剣解放”したウルキオラと闘い、力尽きて気絶したんだった。その記憶が

次第に鮮明に甦ってくる。我ながら、よく生き残れたと思う。黒崎護主人公ですら手も足も出

ないウルキオラと死闘を繰り広げ、どうにか生き残ったのだから……。”  
レスレクシオン・セクンダ・エターバ  
 刀剣解放第二階層”までされていたら、もしかしたら終わつていたかもしれない。  
靈圧が消えていた

『そして……あなたの力は、ウルキオラ・シファーとの闘いによって進化した』

下手したら終わっていたかもしれない。それでも、ウルキオラとの闘いが俺に与えた影響はとて大きかったようだ。

しかし、それよりも気になるのは俺が気を失つて以降がどうなったのかだ。

辛うじて、夜一さんが駆けつけてくれたところまでの記憶は残っている。それが最後の記憶で、それ以降の記憶はまったく残つておらず、夜一さんが到着したということは、恐らく浦原喜助も到着したのだろうという予測しかできない。

一護もその後には到着したのか……。一護とウルキオラが闘ったのかどうか……。実に気になるところだ。

本来なら、茶渡泰虎はヤミー・リヤルゴに右腕をもがれてしまい、そこに黒崎一護がやつて来て闘い、内なる虚の影響を受けてしまったことも影響して一護も惨敗し、夜一さんと浦原さんが助けにやつて来るという展開なのだが、俺が腕をもがれたくないあまりにヤミーを撃退したことでウルキオラが黒翼大魔ウルシエラゴになるという予想外の展開に発展してしまった。

正史とはまったく違った展開で、もうこれから先がいったいどうなってしまうのか予

想できない状態になってしまっている。もったも、それは偏に俺が原因だ。

「ん……んん……」

『夜一さん、物凄く心配されてましたよ。』

なので、まずは夜一さんのご機嫌とりですね』

ただ、俺がまずやるべきことは寝起き甘えつ娘な夜一さんをとことん甘やかすことである。

「チャ……ド……?」

ん、チャドの匂い……大好きじゃ……ふふ」

ああ、もしかしたら俺は、ウルキオラとの死闘で、実は死んでしまっていたのかもしれない。寝起き甘えつ娘は天使へと進化していた。



何度目の青天の霹靂だろう。

夜一さんの寝起ききの可愛さを堪能した俺を待ち受けていたのは、衝撃的な事実……残りの夏休みで進化していたのは俺だけではなく、一護もだった。

「到着した一護が”虚化”した時は儂と喜助も心底驚かされたもんじゃ。しかも安定し

た状態で虚化しおつた」

残りの夏休み、一護とは連絡を取り合っていないが、その間にいったい何が起きたのだろうか。一護が虚化を体得するのはまだもう少し先のことで、新たな介入者――

「仮面の軍勢」の手助けが必要不可欠なはずだ。それを独力で体得したのだろうか

…。

しかも、「黒翼大魔」状態のウルキオラと拮抗した勝負を繰り広げていたというのだ

から驚きである。確かに、俺の記憶にある……正史の黒崎一護よりも、一護は強くなつてこそいるが、まさかここまで変化が起きようとは思ひもしていなかった。

ただ、今後の展開がまったく予想できない。強くなつた弊害は、もしかしたらあまりにも大きいかもしれない。

「ウルキオラという破面の口振りでは、破面の斬魄刀解放には、死神の斬魄刀と同じよう  
な…始解と卍解に当たる解放が存在しているようじゃ。」

つまり、ウルキオラには更に上の状態があるということ。奴の第一段階の解放状態は  
霊圧から見ても卍解に匹敵…いや、それ以上かもしれない」

どうやら、ウルキオラは「刀剣解放第二階層」まではさすがに披露しなかつたよう  
だが、更に上の状態があることを仄めかしてはいたらしい。ただ、俺はウルキオラのそ  
の行動に、強い危機感を抱いてしまっている。俺のこの不安、心配が杞憂に終わってくれ

ればいいのだが、こういう時の勘は、まったくもって喜べないが恐ろしいくらいに当たってしまった。

レスレクション・セグンダ・エターバ  
 刀剣解放第二階層の存在を大々的に仄めかしたということは、藍染にも知らせているはず。もしかしたら、他の破面達もそれを体得している可能性が高い。

そして何より、ウルキオラは第二階層の更にその上にまで辿り着いてしまった可能性も高い。正史原作ではないが、ウルキオラがその姿を披露している記憶が俺の中には残っている。

もしこれが事実ならば、相当に危機的な状況なのかもしれない。

もし、今現時点で藍染惣右介の下にレスレクション・セグンダ・エターバ“刀剣解放第二階層を体得した破面が10体以上存在していたらソウル・ソサエティ尸魂界は滅亡するという最悪の事態が、本当に起きてしまうかもしれない。

『私の本体崩玉ですからねエ。

それくらいは平然とやっちゃうでしょう』

崩子ちゃんがこう言っているのだ……きつと間違いない。破面の上位勢はきつと第二階層を体得していると考えるべきだろう。俺が生きているこの世界は、何もかもが難易度違う。

果たして俺は、正史よりも遙かに難易度が上がっているかもしれない破面破面編戦を靈圧が消えず生きて乗り越えることができるのだろうか…。

「チャド、おぬしが無事で心底安心したぞ。

じやが、儂をここまで不安にさせるとは…おぬしは本当に罪な男じやのう。そんな罪な男は今日一日、儂と布団の中でゴロゴロすること…よいな？」

きつと乗り越えられるだろう。俺には女神がついている。

チャドが再び挟まれる……だと!?

ウルキオラ・シフアーとヤミー・リヤルゴの襲来から数日後のことだ。

藍染の戦力が“尸魂界”ソウル・ソサエティの予想よりも早く整いつつあることが先の現世での闘いで発覚したこともあり、護挺十三隊から援軍が派遣されることは知っていた……しかし、まさか彼女がやって来るとは想定外である。

「チャ、チャドさん、ご無事で何よりです!!」

虎徹天然隠れ巨乳勇音が勢いよく俺の胸に飛び込んでくるといふ大胆さを身に付けていたのが一番の驚きだ。

「チャド?」

ただそれと同時に、背後からは恐ろしい殺気が放たれている。背後で鳴り響くけたたましい雷鳴が、その度合いを強く表している。だが、恐ろしいけど嬉しい限りである。

「チャドから離れんか小娘」

「ま、負けません。」

あ、相手が“瞬神”だろうと決して!!」

新たな敵の襲来——その前に女の争いが勃発である。実に喜ばしいことではあるが、俺はどうすればいいのだろうか。

前方に長身隠れ巨乳。後方に褐色肌巨乳。このままずっと挟まれていたいと思うのはワガママだろうか…。誰か俺に代わってどうすべきか決めてほしい。



場所は一護の部屋へと移り…。

「何でオレの部屋なんだよ。浦原さんここでいいだろ」

俺は知っているが、一応は現世派遣組の死神達の話を知らない態を装って聞かないといけず、とりあえず一護の部屋へとやって来た。

「おお、チャド！」

無事なように安心したぞ!!」

「おう、元氣そうじゃねエか」

一護の部屋には、すでに尸魂界ソウル・ソサエティから派遣された部隊のメンバーである朽木ルキアと阿散井恋次が待ち構えていた。

この2人に関しては、一護と近しい仲である為に納得できる人選で、俺の記憶通りだ。

その他に、面白そうだからという理由で同行してきた十番隊副隊長・松本乱菊と、引率として派遣された十番隊長・日番谷冬獅郎氷雪系最強も記憶通りだ。

「夜一様と虎徹副隊長に挟まれるとは随分と良い御身分だな…茶渡泰虎。

やはり貴様はここで殺しておくべきのようだな。

（現世派遣を機に、茶渡康虎のアレをもう一度見れると思っていたら、何だこの状況は!?!）」

ただ、派遣される隊長が2人とは想定外。どうやら、人選は総隊長他隊長達の間で行われたのだろう。恐らく、破面アランカルの力——”レスレクシオン 刀剣解放”が想定以上の力だったのも変化が起きた要因の一つだ。

「やめんか、碎蜂。

これはチャドと儂、虎徹勇音の問題じゃ」

「そ、そうです。

碎蜂隊長は口を出さないでください。それから、チャドさんを殺そうとしないでください」

それと、日番谷隊長はともかくとして、もう一人の隊長が碎蜂ボンコツなのはどうかと思われる。

「くツ…（何故だ？私が貧乳だからか？貧乳だから蚊帳の外なのか!?!巨乳じゃないと仲

間入りできないのか!?)」

破面達が俺の記憶よりも強化されているのを考えると、隊長をもう1人派遣するのは納得なのに、こればかりは納得できない。先行き不安である。

『私を殺したいのか!!』と、俺が碎蜂から言われる事態に陥らないか心配だ。

もつとも、更木剣八を派遣されるよりはマシだと思おうべきだろうか…。恐らく、剣八は最初から候補に入っていなかった可能性は高いが…。

勇音さんを派遣したのなら、碎蜂ではなく卯ノ花隊長を引率として派遣しても良かったのではないだろうか…。これからの闘いを考え、医療部隊<sup>四番隊</sup>のトップ<sup>隊長</sup>と、No.2<sup>副隊長</sup>を同じ現場に派遣するのは危険だと判断したのかもしれないが、敵地に2人揃って派遣される近い将来を考えると、これは疑問が残る。

それとも、現世には勇音さんや卯ノ花隊長を超えるかもしれない治癒術を持った現役女子<sup>井織</sup>高生<sup>座</sup>がいるから、勇音さんだけでいいと判断されたのだろうか…。その可能性は高いかもしれない。

「チャドさん、それよりももうお身体は大丈夫なんですか? 何でしたら、い、今から私が診察しましょうか?」

「大方、またチャドの体に触れる為なのだろうが、残念じゃったな。チャドの傷は1日で癒えた。儂が添い寝したおかげじゃろうな。わははははは!」

「ううう…：狡い。」

わ、私もチャドさんと添い寝…：したい」

とりあえず、今は夜一さんと勇音さんが俺の取り合いをしているという幸せを実感しよう。俺の記憶にある十一番隊の2人がどうして派遣されていないのか気になるころではあるが、力不足と判断されてしまったのか…：正解を破壊されなくて良かったねと思っておくことにしよう。

「テメエら…：状況わかってんのか？」

藍染が明日…：もしかしたら今日仕掛けてくる可能性もあるかもしれねえんだ。

恋愛事に現を抜かしてる暇なんざねエぞ」

さすがにこの状況は我慢ならないと、日番谷隊長に注意されてしまった。ごもつともである。

だが、確かにその通りだ。

何故なら、尸魂界から援軍が派遣されたということは、今日再び破面が襲来する。ウルキオラより弱い、俺の記憶よりは強くなっているであろう敵だ。

しかし、それだけならそこまで不安に思う必要はない。敵が強くなっている一方で、俺と一護、そしてこのメンバーの中ではルキアだけが強くなっている。

問題は、強くなったことで起きる変化だ。これまで何度も起きたその変化。何度その

変化で霊圧が消えかけてしまっただろう。きっと、今回も変化が起きるはずだ。寧ろ、敵の強さと闘いに関してのみは、記憶とはまったく違うと最初から認識しておいた方がいいだろう。

「チャドさん、お願いがあるのですが…しばらく現世に滞在するので…そ、その…チャドさんの部屋でお世話になってもいいですか？」

もしかしたら…もしかしなくても一番の強敵は大胆になった勇音さんかもしれない。

??????????

チャドの記憶通りに…敵はさっそく襲来した。

「グリムジョー…カスは引っ込んでろ。」

コイツはオレの獲物だ」

「カスはテメエだ…ノイトラ。」

邪魔だからさっさと虚<sup>ウエコムンド</sup>圏に帰りやがれ」

そして、チャドの予想通りに変化は起きた。

チャドの前に現れた2体の破面<sup>ブランク</sup>。先の闘いの破面——ウルキオラ・シファーよりは弱いが、今現世に襲来している他の破面達と比べたら別次元の霊圧を醸し出している破面である。

その2体を前に、チャドは深く重いため息を吐き出した。

青い髪の雄の1体は茶渡康虎とそこまで接点はないが、スプーン型の異様に長く丸い襟首の服を着た長身長髪の細身のもう1体の雄の破面は、茶渡康虎にとって”鬼門その3”なのである。運命が再び、チャドの息の根<sup>霊圧</sup>を<sup>消</sup>し<sup>し</sup>にやって来た。

「チャド！無事か!？」

しかも、黒崎一護がチャドのもとに到着してしまったことで、鬼門その3との闘いが決定付けられてしまったようだ。この時ばかりは、さすがのチャドも一護を少し恨んだはずだ。

「一護、お前は青い髪の破面を頼む」

「おう、任せとけ」

ただ、一護はどこか嬉しそうにしている。どうやら、久々にチャドと背中合わせで闘うこの状況が嬉しいようだ。対して、チャドは内心ため息を吐き出した。

青い髪の破面の襲来はチャドの記憶通りだが、もう1体の襲来は、最近では恒例行事

となりつつある変化だ。ため息も吐きたくなるだろう。

チャドは、今回は静観するつもりでいた。強くなつた一護と朽木ルキアの他に隊長2人が派遣されたことで、自身への負担も少し減るのではないかと思っていたのである。いや、ある意味では負担が増える可能性も考えてはいるようだが…。

とにかく、今回の襲来では美女2人と仲良く自宅待機のつもりでいたようだ。

「チャド、無理をするではないぞ」

チャドの隣には当然のように夜一がいる。どうやら、同棲生活は継続中のようだ。

「チャドさん、無茶はしないでください」

そして、本当に勇音もチャドの部屋にお泊まりしているようだ。実に羨ましい男である。

しかし、夜一と勇音……2人からそう言われてしまったら、チャドも無茶をせずに頑張るしかないだろう。寧ろ、楽しい自宅待機を邪魔されてしまったのだから、憂さ晴らししようと張り切っているかもしれない。

「行ってくる……夜一さん、勇音さん」

両腕、両脚に鎧アルマドゥラを纏つたチャドは前へと進み、2人に不敵な笑みを向けている。安心させる為なのだろうが、その不敵な笑みに夜一も勇音もうつとりとした表情を浮かべていた。

ウルキオラとの闘いの傷も癒え、今のチャドは絶好調だ。

「テメエが茶渡康虎か!!」

そのチャドにいきなり破面が斬りかかってきた。三日月型の巨大な刃2つを8の字型にくつつけたような形状の斬魄刀の持ち主——ノイトラ<sup>鬼門</sup>・ジルガ<sup>ソ</sup>。

「!

(オレの斬魄刀を…素手で受け止めた…だと…ツ?!?)」

ノイトラは、最初からチャドを目当てに現世へと姿を現したのだろう。どうやら、ウルキオラが虚<sup>ウキョウ</sup>圏<sup>コン</sup>へ帰還後、藍染含む一同への報告を行い、その報告をきっかけにチャドに興味を抱いたようだ。

ただ、ノイトラの様子はチャドに興味を抱いた…そんな生易しいものではない。今にも誰かを殺しそうな危険極まりないものだ。

「歪な形状だが、斬れ味は鋭そうに見えた…が、斬れそうなのは見た目だけのようだな」とは言え、チャドが簡単に殺されるはずなどない。いきなり襲いかかられたにも関わらず、チャドはノイトラの斬魄刀を右手で軽々と受け止めている。

「テメエ…すぐに殺してやる!!」

(最強はオレだ。人間のガキなんかにはオレが負けるはずがねエ!!)

『虚閃!!』

余裕そうなチャドに激昂するノイトラは、一旦距離を取り舌先から“虚閃”<sup>セロ</sup>を放つてきた。

ベンガンサンデ・サタナス  
魔王の復讐

「!?」

（し、しまッ——）」

ソウル・サエティ  
尸魂界から続く鬼門を自らの力で乗り越えてきたチャドは、果たして今回も乗り越えることができるのだろうか……チャドならきつと乗り越えられるはずだ。

ノイトラの虚閃を右腕の盾で吸収し、己の霊力へと変換させたチャドは素早くノイトラの眼前へと移動し、そのまま“ブラッ・イスキエルダ・デル・デアフロ悪魔の左腕”を叩き込む。



けたたましく響き渡る音。

「ぐあアアアア!!」

響き渡る絶叫。

トルトウラ・デル・サタナス  
魔王の拷問

そして、ノイトラの皮膚に真つ赤に残る魔王の手形。

並の死神では傷一つ負わずことのできない破面ブランクの硬い外皮イェロも、チャドには関係ない。

「痛いかな？」

（ウルキオラの方が硬かったような気がするんだが……気のせいかな？それとも、崩子ちゃん  
の言ってたように、ウルキオラとの闘いのおかげで成長したからか？）

肩から先を液体化させるようなイメージで脱力させ、しなやかにスナツプさせた”  
ブラソ・イスキエルダ・デル・ディアブロ  
悪魔の左腕”の掌を打ち下ろし、チャドはノイトラの鋼皮イェロを打ち破り、皮膚に

絶大なダメージ苦痛を与えていた。

その苦痛は、まさしく拷問と言えるほど。

「……の……ブツ殺す!!」

だが、ノイトラは最硬の鋼皮を自称するだけあり、どんなに苦痛を与えられようとも  
決して倒れない。

苦痛に必死に堪え……いや、怒りがその苦痛すらも消し去るほどにまで増大したの

か、ノイトラは斬魄刀を真上へと掲げて力を解放する。

人間であるチャドに敗北することこそ、ノイトラにとつて何よりも苦痛なのだろう。

怒りに満ちた表情を浮かべ、ノイトラが破面の斬魄刀解放——”レスレクンオン 刀剣解放”をお披露目する。

ソウルソサエテイ 尸魂界から現世に派遣された死神達もそれぞれ闘っており、破面達も刀剣解放しているようだが、ノイトラの霊圧は他の破面達と比べても一線を画している。恐らく、朽木ルキアや砕蜂達は直にそれを感じて驚いているだろう。己と闘っている破面とノイトラの差に…。

祈れ・サンタテレサ 聖哭螻蛄

「そういえば、まだ名乗ってなかったなア！」

ノイトラ・ジルガ…”絶望”を司る最強の破面だ!!」

三日月型の角と4本腕を生やし、4本の腕に巨大な鎌を持ったノイトラが、チャドに絶望を与えるべく襲いかかる。

ただ、ウルキオラ・シファアとの闘いを経て成長したチャドが驚くことは決していない。「なら俺も改めて…茶渡康虎だ。」

「自分から最強って言う奴に限って、実は最強じゃないってのはよくある話だよな」  
内心、チャドがそのようなことを思っているなど、ノイトラは知らない。

チヤドが硬い……だと!?

その硬さは常軌を逸している。

人間の常識から遥かに逸脱するどころか、死神、破面アランカルの常識すらも大きく覆すものだ。

「く、くそがア!!」

（あ、ありえねエー!こ、このオレが人間下等生物相手に傷を負わされ、オレが傷一つ負わせることができない……だとツ!?)

”絶望”を司る自称”最強の破面”アランカルノイトラ・ジルガは、目の前の人間——茶渡泰虎という超人を超えつつある未知なる存在との戦いで、自身が絶望を味わいつつあった。

絶望を司るはずの存在が逆に絶望を味わわされるとは、何と滑稽で皮肉なことか…。

しかしそれにしても、ウルキオラ・シファーとの死闘が茶渡泰虎に与えた影響はとてつもなく大きいものだったようだ。

「!?

は、速ッ——がふッ!!」

ラスグニョス・デル・サタナス  
魔王の爪痕・輪舞曲

ノイトラがまったく反応できないスピードで懐に潜り込んだチャドが、”  
ブラッ・イスキエルダ・デル・ディアブロ  
悪魔の左腕”を連続で叩き込むと、大量の悪魔の紋章を刻まれたノイトラは  
吹き飛ばされ、大爆発してしまう。

「一護の方は……うむ、問題なさそうだな。

（正解もせず、虚化もせず、始解の状態で解放前とはいえグリムジョーを相手に圧倒して  
いる。

「正解しないで敵を圧倒するのはやはりオサレだ」

チャドは一切、傷を負わされてはいない。それどころか、ノイトラと戦いながら黒崎  
一護の状況を確認できる余裕まである。

チャドは内心で黒崎一護を絶賛しているが、惚れた女達からしたらチャドの方がオサ  
レだろう。

「また一段と成長しておる。

ふふッ、おぬしはどこまで儂を骨抜きにするつもりじゃ？」

「チャドさん……素敵です」

チャドの戦いの行方を伺っていた四楓院夜一と虎徹勇音は、藍染の率いる破面達の中

でも屈指の力を持つであろうノイトラを相手に圧倒するチャドに惚れ惚れとし、うつとりとした表情を浮かべている。

チャドの勇ましい姿を一瞬も逃さぬように、チャドの逞しい肉体美を2人の美女はその瞳に焼き付けている。

四楓院夜一と虎徹勇音が惚れるのも無理がない。

これが茶渡泰虎なのだ。

「はっ…はっ…はっ…くそ…が…オレより…強い…人間がいて…たまるかよ…」

だが、チャドが強くなったのは確かだが、それに比例して起きてしまう現象がある。

それは、強くなったチャドに引き寄せられているようにすら思え…まさに因果応報だ。

「はっ…はっ…はっ…オレの今の姿…」 レスレクシオン 帰刃”は…死神の”始解”みたいなんだ。

そして、これから見せる姿は…死神の”卍解”… エスパーダ 十刃”だけが可能とした進化だ。

テメエにこれから訪れる未来は絶望…オレがツ——” エスパーダ 十刃” 最最強だ！

——『 レスレクシオン・セクンダ・エターバ 刀剣解放第二階層』

ブ  
ロ  
フ  
エ  
ッ  
タ  
前知の蠟螂

その鋭さは、頭のとつぺんから足の爪先に至るまで……全身が鎌になったかのようである。



絶望に見舞われたのは果たしてどちらか…。

「く、くそがア！」

(ど、どういふことだ!?)

な、なぜ！コイツの未来を視ることができねエ!?)」

レスレクシオン・セグンダ・エターバ

追い詰められ、” 刀剣解放第二階層” まで解放したノイトラ・ジルガ。第二階層の力を解放したノイトラは他者の未来を視る能力を有している。

その恐るべき未来を視る力によって、ノイトラは戦う相手に絶望を与えるのだ。

「未来は自分の手で切り開く……人の未来を勝手に決めてくれるな」

だが、ノイトラの未来視はチャドには一切働かず、逆に絶望を与えられてしまっていた。未来を視ることができず、チャドの拳を食らい、自身の攻撃は一切通用せず、最硬を自負するプライドを悉く粉碎されている。

しかし、いったい何故……ノイトラの未来視がチャドに対して働かないのか…。

「がッ!?

(ま、まただッ…コイツの未来を覗こうとすると…すぐに何かに弾き返されやがる!!

し、しかも、右顔を覆った仮面のようなものを出してから、コイツの硬さが更に増しやがった!!)」

カラ・デレチャ・デ・ヒガンテ  
巨人の右面

それは、チャドが新たに得た力によるものだ。

カラ・デレチャ・デ・ヒガンテ

”巨人の右面”。チャドが先の戦い…ウルキオラ・シファアとの死闘を経て発現した新たな力<sup>層</sup>である。顔の右側半分が、右腕と同じ模様の悪魔のような角の生えた仮面に覆われており、ますます人間離れた容貌へと進化してしまっているが、この巨人の右面を発現したことによってチャドの防御力が底上げされており、自身を脅かすあらゆる外的要因を跳ね返せるのである。

謂わば……本心を隠し、護る仮面だ。

「幕引きと行こうか——ノイトラ・ジルガ」

道理で、ノイトラの未来視が働かないはずだ。

「ふ、ふざけんなアアア!」

「十刃」最強のオレが人間ごときに…負けるなんてありえねエんだよ!

『王虚の閃光 !!』

『王虚の閃光』エスパーダ「それも、ノイトラは」エスパーダ「最強と言っているが、それはあくまで自称であり、

チャドが死闘を繰り広げ勝てなかったウルキオラ・シファーに劣っている。

「これ以上、現世を荒らさないでもらおうか。」

（ウルキオラの「王虚の閃光」の方が凄かった気がする）」

「ば、馬鹿な…この状態で放つ王虚の閃光を…切り裂いた…だと…ッ?!」

それを証明するかのようにな…チャドは内心、ウルキオラとノイトラを比較しながら、軽く引つ掻くように…

ブラソ・イスキエルダ・デル・デアプロ「悪魔の左腕」を振るい、ノイトラにとつて最大火力

の攻撃をいとも容易く切り裂いてしまった。

「少しおいたが過ぎるぞ。」

ノイトラ・ジルガ…罰として、貴様に痛みを与え続ける」

そして、現世で派手に暴れ回りすぎるノイトラに向けて、まるで鞭を振り回すかのよ

うに、チャドは悪魔の左腕を軽やかに振るうのである。

トルトウラ・デル・サタナス ロンド  
魔王の拷問・輪舞曲

躡のなっていない動物を躡るかのごとく、チャドは鞭化した左腕を連続で振るい、ノイトラに叩き込む。

空座町に獣の悲痛な絶叫が響き渡る。

?????????

また一つ、茶渡泰虎にとつての鬼門を乗り越えることができた……そう思っていた。

だが、脅威は次から次へとやって来る。

止まることを知らないように。いや、止まる気など最初からなかったかのように。

そう……男に対して破壊力抜群の凶器を引つ提げて、彼女は降臨した。

「無様極まりないな……ノイトラ」

「ぐツ——ハリベル…… teme エツ……!!」

褐色の肌に金髪。上着で隠してこそいるが、口元付近に虚時代の仮面の名残が見え隠れしており、上着の下の胸部は下乳部分が丸出しで、下半身は太腿の辺りが丸出しになった袴状の衣服といふかなり露出度の高い服装の女幹部にして後の囚われの姫君——

「ティア・ハリベルの登場だ。」

「よ、よくもオレの脚をツ…!!」

脚を斬り落とされたノイトラとは違って、ティア・ハリベルの登場によって俺の下半身が臨戦態勢に入ってしまった。知ってはいたが、いざ実際に目にするるとまた違った……想像以上の破壊力が俺に襲いかかってきた次第である。

「チャド…おぬし前屈みになって…ナニをしておる?」

「チャ、チャドさんツ…!」

（ひゃあアアア!）

は、激しい戦いでアドレナリンが出て、あ、あんな風になっちゃったの!?)」

それはもう、夜一さんと勇音さんにも丸分かなりな程にである。済まぬ。

それはそうと何故、タイプド真ん中のティア・ハリベルがこの場所に現れたのか…。

「グリムジョーと共に独断での現世侵攻…命令違反だ。」

おまけに、グラン・レイ・セロ「王虚の虚閃」レスレクシオン・セクンダー・エターバだけではなく、あろうことか刀剣解放第二階層の現世

での使用。

文句を言える立場ではないことすら解らないのか?」

霊圧を探ってみると、もう一人現世にやって来ており、それが見知った霊圧なのもあり、夜一さんと勇音さんは顔を顰めている。

そのもう一人は一護の方におり、ティア・ハリベルが現れたのはつまりそういうことなのだろう。

本来なら、ティア・ハリベルがこの場所に現れることはないはずだが、彼女が現れたのは、俺が強くなって戦いに参加していることや、ノイトラ・ジルガまで現世に襲来したことなど、いくつかの変化が起きたことによつて起きたものだ。

人選としては、間違いではない。”<sup>エスパーダ</sup>十刃”の中でこのような役目を与え、問題なく役目を果たせるのはティア・ハリベルかウルキオラ・シファークくらいだろう。いや、あと2体くらいはいるかもしれないが…。

しかしそれにしても、俺のもとにティア・ハリベルを送り込むとは、藍染惣右介もなかなか気が効く男である。ふと思つたのだが、ティア・ハリベルの今の序列が俺の知っている通りの”<sup>トレス</sup>No. 3”なのかは定かではないが、藍染はNo. 3に前任者も含め下乳が凶器的な女幹部を就かせていた。それはつまり…<sup>藍染の性癖</sup>…そういうことなのだろうか…。

ともかく、ティア・ハリベルがNo. 3なのかどうか…彼女の服のファスナーを是非とも解放してほしいものである。”<sup>レスレクション・セグンダ・エターバ</sup>刀剣解放第二階層が解除され、満身創痍だったのもあるかもしれないが、ノイトラの脚を容易に斬り落とすあたり、俺が知っている以上に彼女も強くなっているはずだ。

果たして、最年少隊長はティア・ハリベルに勝てるのかどうか……。もしかしたら、少し老けた彼が早くに見れるかもしれない。

そこも含め、ティア・ハリベルからは目を離せない。

「チャド、おぬし今どこを見ておる？」

儂の目を見て言うてみる……ん？

素直に言えたならば、今日頑張ったご褒美を与えてやるぞ？」

やはり、俺は褐色肌の巨乳にとことん弱いようだ。

「あ、あの……今それどころじゃ……」

チャ、チャドさん、戦いが終わったら私も頑張るので……あ、が、頑張るってその、あ

の……ええと……」

やはり、ド天然長身隠れ巨乳も甲乙つけがたし。

夜一さんに勇音さん。それからティア・ハリベル。先程まで、ノイトラ・ジルガと激闘を繰り広げていたというのに、むき苦しかった場が一気に様変わりだ。

「ふむ……貴様が藍染様が仰っていた人間——茶渡泰虎か。

なるほど、ノイトラが勝てないはずだ。強大な霊圧も然ることながら、佇まいからして違う。まさに”戦士”だな。人間にしておくには勿体ない」

気付くと、いつの間にもやら現世と”虚圏”ウエコムンドを繋ぐ穴——”黒腔”ガルガンタが開いており、ノ

イトラは屈辱的な様子でフラシオン従属官に肩を貸してもらい撤退中だった。

そして、ティア・ハリベルが俺を見下ろしながら声をかけてきた。心に……全身に響くものがある。

「次に会う時があれば、ぜひ戦ってほしいものだ」

それはもうこちらからもお願いしたいところである。

「茶渡泰虎……また何れ会おう」

「チャドに馴れ馴れしく話しかけるでない。

露出狂のハレンチ娘」

ただ、夜一さんはティア・ハリベルをお気に召してくれないようだ。それから、露出狂とは言っているが、夜一さんは「裸族」。人のことを言えない気がするが、それについては言わない方がいいのだろう。何より、俺が眼福なのだ。

「チャ、チャドさんはとても素晴らしい……素敵な人間です。あなた方アランカル破面”とは決して相容れません！」

「貴様達……死神こそ、茶渡泰虎を理解していないのではないか？ふッ、まあいい。私と茶渡泰虎は何れ必ず戦うことになる。それが戦士の運命というものだ」

ちなみに、この後に知ったことではあるが、一護は「月牙十字衝」でグリムジョーに十字の傷を残したとのことである。終始、一護の優勢だったとか……

他の隊長方は、限定解除して勝った模様である。